う！……」

と、彼は、美しいメリーを中心に、神の復活を祈る教會の光景を眼に描き、澄み渡る讃美歌の曲の音、皓々と光る電燈、高く神嚴な天井、大きな十字架の像、口を揃へて歌ふ多くの祈りの人々、祈りて祝福された崇嚴な空氣を思ひ浮べる。

その美しき讃美歌の樂の音のうちに、神によりて淨め祝福されて、清く一心に祈りを獻げて居る、無垢の處女を動悸打つ戀人の白い彼女の胸、その輝かしき——今に天使の羽根が生えて、天高く舞ひ上り去にはせぬかと危ぶまれるばかりの——メリーの靈、その祈りの乙女の心の純潔な清らかさを、電燈の光に輝き燃ゆる金髪の彼女の美しさを、彼は又ぢいッと夢見て恍惚として居る。

『あゝ、彼女はなんと美しいだらう！』

と、彼女を祝福して胸に合掌し、清い月を眺め上げて神に祈る。

神の大海原の蒼空は、星をちりばめて嚴肅に神嚴に、この世の萬物を包んで居る。廣大無邊と永遠とを訓へて居る。

彼は深く吐息ついて、戀しいメリーの上に祝福あれと祈り續ける。

『神樣！　どうか彼女の上に安らけきと幸いとを與へさせ給へ。清き彼女の胸に天使のやうな愛に滿ちた一人の良人を與へさせ給へ……！　そうして彼女の胸を安らへ憩ひさせ給へ！』

と、涙ながらに祈る。

風も今はとだえて、寒月はますゝ清く冴え渡る。

大地は寂靜まつて、闇の京城の街は何んの音もない。我が主人公は、祈りからさめて急に力を落として頷垂れた。

「俺は彼女を愛して居る！　故に彼女に遇ふことは出來ない」

と、溜息ついた。自分の陰をぢいッと又見詰めた。

「俺は彼女に遇ひたい……いや俺は出來ない！」

と、彼は苦しい頭を激しく振つた。

「俺はどうして彼女に遇ふことは出來ないんだ？」

こ、いきなり彼の中の或るものは叫んだ。
彼は頭の中の悶へに酷く漾搔いた。苦しく顏をしかめた。
『アー神樣！……』
こ、手を漾搔いて頭を振り、激しく喘ぎ叫んだ。苦しさに齒をかみしめた。
『それは出來ない！　それは罪惡だ！』
こ、彼は又苦しまぎれに叫んだ。
急に兩手を合せて握りしめ、眼をつぶつて、プル〳〵顏へながら頭を下げ、涙の胸の底で、
「メリーさん〳〵、わたしは本當にあなたに遇ひたいのです、わたしの胸は神樣がよく知つてゐます。しかし、もうあなたには遇ひません、遇ふことは出來ません。今わたしはあなたに遇ひに參りました。互に昔を語り合ひたいのです。わたしがどんなにあなたを愛し、あなたを戀しがつて居るかは、神樣はよう御存じでゐらつしやいます！……
あなたこ昔戀しあひ、互に手を取りあつて囁き逍ぎ歩いた庭は、今わたしの眼の前にあります。わたしは今あなたの家の門の前に立つてゐます。昔の月は今もわたしを照らしてゐ

ます。わたしにあなたを偲ばせるのです、ごうして、わたしはあなたを慕はないで居られませう！……あなたこ百年の共白髮を誓つた間柄なのです。あなたの處女の胸を痛めさせたのもわたしなのです……メリーさん！メリーさん！ごうかわたしのことを忘れて下さい。……ね！……わたしはごうしてもあなたの姿を慕はないでは居られません！……福からわたしはあなたのこをすつかり聞きました。地下の白骨の母もあなただけには感謝して居ります……何時もながら、あなたは麗はしい心の！……あゝわたしは、ごうしてあなたに戀しないでゐられませう！　戀してます！　骨も肉もあなたのために生き殘つて居ります！……しかしわたしはあなたに遇ひません。それはあなたの乙女心の淸い胸に、ます〳〵その痛みの傷口を大きくさせるだけです！　わたしはあなたを眞心から愛して居ります！……しかし、この世は許しません！……」
こ、聲を震はして彼は拜んだ。額を、握り合つてゐる兩手におしつけて、苦しく涙を絞り泣いた。
シク〳〵こ胸を鳴らして咽び泣き續けた。

「……わたしはあなたに全身全靈を獻げて愛して居ります、故にあなたの胸に痛みを增させることは出來ません、わたしは自分の胸が痛むのです。わたしは既に朽ちかゝつて居ます、骸骨こ髑髏に兩足を踏み跨いで居ります……それにあなたは今咲き出でようこする花の蕾なのです。どうかわたしのことを忘れて下さい！……ね！……メリーさん！……昔のことを忘れて下さい。外に戀しい愛人を求めて下さい。白いあなたの美しい淑やかな頸を、外の愛人の腕に捲かせて下さい！……ね！……」

こ、彼はます〳〵全身を顫はせて泣く。

「……わたしは神樣にお祈りします。

わたしの胸はわたし一人で痛みたいのです。天使のやうなあなたを清らかに育てたいのです。傷つけたくはありません。

わたしこあなたはどうしても、この世では二人一緒には生きられません。この世の中はそれを許しません。わたしは罪人です、破獄囚です！……

それにわたしはこの世が厭はしいのです、生存の殺傷を行ふことは出來ません。この世に

た」

『それは、すべてこの世の悲慘こ殺傷こ苦しみこを增さうこしたことだ！』

こ、忌々しさうに呟いて、

「俺は出て行かう……」こ、冷靜に歸らうこした。が、彼の頭の中は、又苦悶の熱でほうこ重苦しく痛んで來るばかりであつた。熱はます〳〵炎々こ募つていつた。

遠くで、汽笛の音が高く唸る。

松の葉は微かに冷たい夜風に慄く。

「いや、俺は遇ふ！戀はこの世での最大なる幸福だ！」

こ、彼のうちの或るものは酷く熱をのぼして、又激しく叫んだ。

忽ち

「いや！」こ、或るものは反駁した。

又前のものは

「俺は遇ふ！　遇うて抱きあふ！」

「……わたしはあなたに全身全靈を獻げて愛して居ります、故にあなたの胸に痛みを增させることは出來ません、わたしは自分の胸が痛むのです。わたしは既に朽ちかゝつて居ます、骸骨と髑髏に兩足を踏み跨いで居ります……それにあなたは今咲き出でようとする花の蕾なのです。どうかわたしのことを忘れて下さい！……ね！……メリーさん！……昔のことを忘れて下さい。外に戀しい愛人を求めて下さい。白いあなたの美しい淑やかな頸を、外の愛人の腕に捲かせて下さい！……ね！……」

と、彼はます〳〵全身を顫はせて泣く。

「……わたしは神樣にお祈りします。

わたしの胸はわたし一人で痛みたいのです。天使のやうなあなたを清らかに育てたいのです。傷つけたくはありません。

わたしとあなたはどうしても、この世では二人一緒には生きられません。この世の中はそれを許しません。わたしは罪人です、破獄囚です！……

それにわたしはこの世が厭はしいのです、生存の殺傷を行ふことは出來ません。この世に

欠

た。

『それは、すべてこの世の悲慘と殺傷と苦しみとを增さうとしたことだ！』

と、忌々しさうに呟いて、

「俺は出て行かう……」と、冷靜に歸らうとした。が、彼の頭の中は、又苦悶の熱でぼうと重苦しく痛んで來るばかりであつた。熱はます〳〵炎々と募つていつた。

遠くで、汽笛の音が高く唸る。

松の葉は微かに冷たい夜風に慄く。

「いや、俺は遇ふ！戀はこの世での最大なる幸福だ！」

と、彼のうちの或るものは酷く熱をのぼして、又激しく叫んだ。

忽ち

「いや！」と、或るものは反駁した。

又前のものは

「俺は遇ふ！　遇うて抱きあふ！」

欠

と、叫んだ。

彼はこうした詰問と駁擊との心內の焰の苦しさのあまり、「どうでもなれ」と、洋館の方へ駈け逃げようと喘いだ。

「いや、瞬間の露だ！　苦痛だ！」

と、又或るものは、體をぞつとさせて、彼を引ッ攫んで、いきなり彼の脚を固く止めた。

「……それは罪惡だ！」

と、そのものは渦卷の中から、眞赤な狂火をパッと散らして叫んだ。

彼は思はず頭をぞつと震はして、縮み上がつて、苦痛をこらへるために唇をキュッと嚙みしめた。顏を酷く眞蒼にしかめて、眼からは火花が物凄く散つた。

「戀は幸福だ！」

と、いきなり反對の或るものは胸の奧底から、吃驚するほど大きい聲で怒鳴つた。

突然又何處からか外の火の釘が、彼の頭の中にキョッと飛びついて、鋭く痛く、彼の全身をビリ〳〵ビリッと慄き痛ましく刺しつけて

「……それは完全なる靈肉の人間社會で、初めて戀は最も幸福だ！　讃美すべきことだ！しかし今の、物質のための自他の區別のこの世の中では、すべての人間の本能も皆お前自身を利し、自己を幸いならしめるために、人を犧牲に供せうとする策略だ！　表面の繕ひの僞りだ！　そうして却つて又自己も幸いならしめず、おまけにお前自身の本能をも生長せしめられないことだ！

人間は自分が人を愛せんとするは、人に愛をおしつけることだ！……」

と、その或るものは、口早く熱火の如く、猛り叫び續けて、彼の頭は熱に眞赤に燒け狂つて來た。

そのものは又猛つて、全く彼の頭も體も熱の脚で踏み潰してしまつて、突擊の火花の及を失らして、

「だから、メリーに戀することも、お前自身の滿足を得るためだ！　おしつけようとすることだ！　若しお前がメリーを嫌がる時に、お前は幾らメリーが戀して來ても撥ねつけるに定つてゐる！　それにこの世の中は物質のための利に、けふの戀人も明日は相ひ爭はな

ければならない！　又お前が性の滿足をした時に、メリーが嫌になる！　そはすべて人間の苦痛をますことだ！　又やがてこの殺傷の苦痛の巷に、一人の人の子を產まして、生きるがために生れたその兒を、死のためのこの世の慘苦に惱ましめる前提ではないか！……お前はメリーに遇ふことは出來ない！……それはお前の滿足のために、メリーの胸に血の釘を打ちつけようとすることだ！……」

と、叫んだ。

彼はブルッと自己の罪惡の戰慄の惡寒にぞつとして、體が縮み上がつた。

眞赤な火に、全身が爛れるやうな苦しさに、彼は『ウーン』と、熱苦しい呻き息を吐きだして、體が固くなつて慄き、――あまりの煩惱の狂ひの藻掻きに、頭の焰を振り落さうとすることすら出來なかつた。

洋館の燈は木陰からチラッと洩れてゐる。

暫らくの間、彼はどうすることも出來なく、非常に悶へ苦しんでばかりゐた。頭はますますはり裂けるやうな苦悶に痛んで來る一方であつた。

「俺の頭はどうしてはり裂けないんだ！」

と、彼は狂つて、兩手で髮の毛を激しく攫み拐つて、息塞まつて喘いだ。

「あー！」と、物凄く齒を嚙みしめ、酷く頭を振つて仰のき

「いやもう俺は死んでしまふ！」

と、自分の胸を叩きつけた。齒をキィーッと軋らした。

急に彼の眼は光り尖つて、常盤樹の際間から洩れ來る洋館の燈をキューッと睨みつけた。

グラ〳〵とぐらがへつて居る、苦悶の彼の頭は、急に凍つて固くなつて、

突然彼は、

『メリーは待つてる！』

と叫んで、いきなりその洋館の方へ駈けて行つた。

月は梢にかゝつて、冬枯の木の陰は、凍えた地に冷たく落ちてゐる。

遠くの敎會の讃美歌の音も止んで、廣い庭は何んの音もなく、月は無心に照らして居る。

我が主人公の彼は、息をもつかずに走り續ける。

その足音のみが狂はしく、あたりに響く。

『あー俺はどうしたッ！』

と、吃驚して、洋館の石段の前に突立ち止まつた。

「いや、あの部屋にはメリーが居る！」

と、彼のうちの反對のものはアッと叫んで、電燈の光の洩れて居る、二階のメリーの部屋をキョッと見詰めさせた。

手をブル〳〵顫はし、眼はつぶり、頭は悲痛に後垂れて

「メリーは待つて居る」

と、痛ましく叫んだ。

彼は又突然ハッと我に歸つたが、遽かに石段を駈け上がつていつた。

『あー　俺は？……』

と、體をぞつとさせて、扉（ドアー）の前に突立ち止まつた。

「俺はどうしてこんな處に來たのだ？」

と、後悔の念がムラ〳〵と湧き上がつて、頭は重垂れた。

「俺は罪人、人間は物質競爭、制度、社會、智慧、法律、道德！……それは皆、括る、縛る、道具、苦痛、涙、殺、血、死！……」

と、彼の頭の中は又鼎の沸きかへるやうに、カッと藻搔きの焰が狂ひ亂れて、怒り狂ひ猛りあつた。

「俺はどうする、この苦痛から遁れたい……」

と、悶へ苦しんだ。

明るい月は宏莊な洋館の軒端を左から滑つて、女闕の石柱と敷石の半分は、眞白くはつきりと輝き、我が主人公の立てる入口の扉から半分は眞黑い。

右手の應接間の窓からは、電燈の光が煌々と洩れ出て、グランケル氏の聲と子息（むすこ）の小グランケルの聲とが、何にかを亢奮して言ひ爭つてゐる。

我が主人公の彼は

「いや、いや！　俺は入ることは出來ない！」

と、頭を惱ましく振つて、

「俺はどうしてこんな處に來たのだ！」

と、泣きだすばかりに痛ましく、又後悔した。頽垂れた頭を又横に振つて、扉から離れて、眞暗い右の隅ッこにヌーッと立ち止まつた。

全身の神經を恐ろしく尖らして、メリーの聲を一生懸命に聞き探つた。

が、彼は頭を振つて

「いや俺はメリーに遇ふことは出來ない」

と、ます〳〵悲痛な思ひに惱み沈んだ。

しかし頭の苦熱はだん〳〵減つていつた。痛ましい悲しみはます〳〵鋭く、彼の胸をちぎり惱ました。

突然、あたりの空氣をつき破つて、激しきつたグランケル氏の怒鳴り聲が、

『貴樣は獨逸國民ではないぞッ！　貴樣は獨逸帝國を顚覆せんとする叛逆者だぞ！』

と、叫んだ。

『勿論です！』

と、その子息の小グランケルの聲が、嘲笑的に落ち着き拂つて答へて、激しきつた叫び聲で何かを言ひ續けようとしたが、その答へが終るか終らぬうちに、グランケル氏の亢奮しきつた聲が又、

『貴樣は俺が何か知つてるか？』

と、卓を强く叩く音が立つ。

我が主人公は、急に自分の瀆搔きから吃驚して顏を上げた。

眼がまるくなつて、驚いた血が頭にグラッ〳〵こぐらつきのぼつた。

『知つてる！……』

と、小グランケルの燃えたつた聲が答へて、叫び續けた。

『知つてる！　獨逸帝國の走駒たる名譽領事は、スパイだ！　ホーヘンツヘレルン家の崇拜者で！　保守黨で！　軍閥で！金持だ！　そればかりか、僕は、今に二人が互に銃劍を執つて敵味方に分れ、街路に立つて殺しあふ日の近いことも知つてる！……』

『何をこのお喋りめ！……』

と、グランケル氏のブル〳〵激しきつた影法師が、飛んで電燈の光を横ぎりながら怒鳴つた。

『その名譽領事の職は、獨逸帝國のために、又獨逸國民のために、如何なる職權を持つてゐるか知つてるかッ！』

『知つてる！　僕を臺頭斷にのぼすか！　僕等が人類の叛逆者のカイゼルを斷頭臺にのぼすか！……』

『馬鹿こけッ！　この革命の餓鬼めッ！……貴樣は死刑を覺悟してゐるかッ？』

『してる、してるとも！　主義のためなら何時でも死んで見せる！……獨逸帝國が潰れる日に、あなたの首も、勝利の革命軍の手によつて切られることを知つてるかッ？』

『貴樣は生意氣だ！』

我が主人公は、その恐ろしい怒鳴りあひの惡毒さに、眞暗い隅ッこでブル〳〵慄いてゐる。

「どうして人間は、親子相爭はなければならんのだらうか！」

と、彼の心は叫ぶ。

『生意氣だ？なにが生意氣だ？紳士の體面を冒瀆する！』

『何に、この革命の餓鬼めッ！』

と、叫んで、グランケル氏は卓から何かを取り上げて投げつける。窓硝子がビシヤンと破れて、外に呼鈴が投げ出された。

猛虎のやうに狂ひ叫ぶ二人の怒鳴り聲は又續く。

床板を踏鳴らす物音が凄い。

『よし！　投げつける！　尋常に勝負をしろ！』

と、小グランケルは怒り猛つて叫んだ。

『よし、覺悟しろ！』

と、グランケル氏は叫んで、いきなり部屋から飛び出て、足音荒々しく二階の方へ駈けのぼつていつた。

『よし！』と、小グランケルは怒つて口を喰ひしばる。

遠くで犬の吠聲が聞える。

『糞ッ獨逸帝國の走駒を倒せ！　革命萬歳！』

と、小グランケルは一人で床を踏み鳴らして、暴々しく叫んだ。

我が主人公は

「それは罪だ！　人間はなぜ爭ふんだ！」

と、體をぞつとつくめた。その時、突然庭で足音が立つた。

彼は吃驚して後を振り向いて、

『あッメリーさんが！』

と、體をキョッと顫はして、全身が柱のやうに固くなつてしまつた。

感覺が鋭く尖つて、足音のする方を夢中に見詰めた。

彼の體は震へ鳴つてゐた。

常盤樹の陰から、メリーの姿が月を浴びて神々しく、明るい石段の前の廣い路に、ウットリと陰を地に投げて現れた。

我が主人公は胸も感情も凍つて、息も塞まつて一層鋭く見詰め通した。兩手は固く握りしめ

られて慄いてゐた。

月下に動くメリーの姿は、悄氣て立ち止まつた。

『お嬢樣はなぜそんなことを考へなさる？……』

と、乳母は彼女を宥めるやうに、なじるやうに言つた。

『寒いから早く入りませう？』

と、メリーの顏を見上げて、氣の毒さうに促した。

それでもメリーの姿は俯向いて立ち淀んでゐる。

あたりは何んの音もなく、澄みきつた月色ばかりが輝いてゐる。

應接間では小グランケルが、又『糞ッ！……』と一人怒鳴つて、椅子を蹴飛ばす物音がした。

『お嬢樣、今晩は折角祝福された夜ではございませんの、さア入りませう、風でも引くと

お體に惡いですから……夜風は體に毒ですよ』

美しく輝いて居るメリーの姿は、怨めしさうに月を見上げて、なんの返辭もない。

固く強ばつて、見詰めて居る我が主人公は、今は慄きも出來なく、釘づけにされて棒立ちに

なつて居る。

『奇麗いな月ねエ?』

と、メリーの沈んだ聲が、暫くして、泣き悲しむ雲雀の音のやうに、あたりの月色に響いた。

『さうでございます、本當にい、月ですこと!』

と、乳母も月を見上げる。

『まア嬢樣は何時もそんな悲しいことばかりを考へなさらないで……キリスト樣は蘇りなさいましたよ』

『……え……!』と、メリーの聲は涙を呑んで、又俯向いた。

月はキラ〳〵と常盤樹に輝く。

やうやくのこと二人の姿は動きだした。だん〳〵石段に近かよつて來た。

我が主人公の眼はメリーを追うて動いた。急に血が頸筋から頭にかけてグラッとした、胸がドキッと落こされて、動悸が心臟をはり裂くほど騷きだした。

「俺はどうした?」と、今更吃驚して、何處かへ逃げ失せようとして藻掻いた。

メリーの輝く姿は、すぐ眼の前に迫つて來た。

彼は急に頭がボカンとして固く、體は又酷く顫へだした。

メリーは物哀れな溜息を洩らして、無言に石段を上がつて來た。

我が主人公は、彼女のあまりの神々しさに、體は又こはく固まつて、出來るだけ暗い隅つこに、小さく隱れ立つた。

「あ! 恐ろしい!」

と、堅く眼をつぶつてしまうとしたが、却つて彼の眼は鋭く、メリーを見詰め續けた。

メリーは石段をやつと上ぼり終つて、また悄氣止まりながら、

『妾はもうあの方には、一生遇はれないやうな氣がしますわ!』

と、沈んで、頭を横に遣瀬なく振つた。

『まあお嬢樣、あんなことを!……』

と、乳母は心から驚いたやうな大袈裟な表情をして、

『今夜は折角祝福された夜ぢやございませんの、お嬢樣?……』

『でも妾!……』

と、彼女は言ひ淀んで、又月を悲しさうに見上げる。

我が主人公の手は、急に宙を攫んで恐ろしく顫へた。

『あッ メリーさん!』

と、激して叫びださうとした。が、急に何ものがゞ彼の喉元を引ッ攫んで、一時に眼の前に火花がクワッと散つて、眞暗く、『あー』と、非常に苦しく蟲の音よりも小さく喘いだ。

口がちよつとこの間締りなくポカンとしたが、急に齒をむき出して凄く嚙みしめて、ブルッと全身を震はした。

體は縮まり、頸はつくめられて、眼ばかりが光り尖つた。

月色は燃えたつて、美しく、メリーのまる〳〵しい——しかし戀窶れした——曲線の彼女の顏を照らして、外套の襟からすべつて輝く。

我が主人公の眼には、彼女の姿が天使よりも神々しく、又霜にたゞれた薔薇よりも哀れに無慘であつた。

メリーと乳母の陰は、ハッキリと敷石の上に映つてゐる。

メリーの鼻からは、微かに處女を痛む溜息が、又吐きだされる。

急に皆は吃驚して、二階から駈け降りるグランケル氏の足音に驚いた。けれども、我が主人公ばかりは、その驚き見交はす姿の、メリーをばかり見詰めて身動きも出來なかつた。

突然彼の後の應接間から

『覺悟しろ、玆に貴樣のためにピストルがある!』

と、グランケル氏の聲が叫んだ。

『よし!』と、小グランケルの聲が應じた。

常盤樹の陰は、寒い夜風に颯々と搖り動く。

乳母とメリーの姿は、吸ひ込まれるやうに、後には月光ばかりを残して、扉(ドアー)の中に消えていつた。

我が主人公はブルッと體を顫はせて、又「メリーさん!」と叫びださうとした。が、息塞まつて苦しいばかりであつた。

『打つちやつておきなさいよ、何時もあゝ言つてはすむぢやないの』

と、乳母の聲が聞えて、二人の足音は二階の方へ消えた。

我が主人公は、やつと、塞まつてゐた胸が少しすいたやうな氣がしたかと思ふと、急に又激しく動悸が高まつて來た。

彼は遠かに「あッ！　俺は！……」と、ワッと苦しさに泣き出さうとした。が、反對に、又體がブル〳〵震へだした。

息も苦しく絶え〴〵に喘いだ。

『この革命の餓鬼ッ！　電燈を消して、一二三で打つんだぞ！』

と、グランケル氏の聲が又叫んだ。

『よし、カイゼルを倒せ！』

『この叛逆者め！　も少し向ふ行けッ！』

と、又怒鳴る。

『心配するな、紳士だ！』

と、答へ叫ぶ。

「あッ！罪惡〳〵！　彈が飛んで人間は斃れる！……俺はどうした！　メリー、メリー！……」

と、我が主人公は全身が慄き、眼を痛みつぶり頭を振り、奥歯を噛んで藻掻き苦しむ。面は苦悶の焔で又グルまかれる。

『貴樣は、電燈を消してから、一二三で打つんだぞ！』

と、又怒鳴る。

グランケル氏の持つて居るピストルの陰は、窓に戰き映つて居る。

『知つてる！』

と、小グランケルは叫んで、部屋は急にシーンと音絶えた。

重苦しい沈默が壓し續いた。

グランケル氏のピストルの陰はます〳〵顔へだした。

月は朗々と光る。夜は靜まりかへつてゐる。

狙撃の瞬間は刻々を刻む。

我が主人公は、又頭を激しく振つて、

「人間が死ぬんだ！」と、血狂ひ悶へて、扉（ドアー）の前に走りよつた。

「嘘！」と、ハンドルに手をかけた。が

「いや俺は！」と、苦しく喘ぎ、顔を仰ぎ垂れて、又隅ッこの方へ走り寄つた。

メリーの部屋でカタンと音がする。彼はハッと眼をまるくして驚く。

『も少し右によれ、今に電燈を消すぞ！　い、か？』

と、グランケル氏は念を押して脅え叫ぶ。

『早く消せ！　走駒め！』

と、小グランケルは怒鳴る。

『よし消すぞ！　い、か？』

『い、ども早く消せ！』

電燈がパッと消える。

『萬歳！』

と、ワッと叫び聲が双方から立つ。

我が主人公はぞつと身震ひする。

『……一チ……』

と、叫び聲が立つ。

瞬間は刻々時を刻む。

『……二イ……』

と、脅えた聲が急迫を告げる。

『革命萬歳！』

『カイゼル萬歳！』

と、最後の叫び聲がワッと立つ。

眞暗い部屋は搖き震へる。

我が主人公は消魂しく飛び込む。

さすらひの空

『同じことだ！』

と、いきなり怒鳴る。

家中はドッと騒ぎ立つ。

『人間が死ぬッ！』

と、又叫ぶ。

メリーも乳母も飛んで來る。

電燈がパッと光る。

メリーと彼の眼はキョッと見詰めあふ。

――『アッ！』と、メリーは驚き叫んで、ドーッと後に蹌めき倒れようとする。

乳母も我が主人公に驚き、慌てて走りよつてメリーを支へる。

復活の鐘の音が、ゴォーンと鳴り渡る。

『あー神様！』

と、彼は祈り叫ぶ。聲は震へて、涙は流れ出る。

グランケル氏と小グランケルは手からピストルを落として、彼に駈けよる。

『主は蘇り給へり！』

と、乳母は祈る。

皆は跪つく。

メリーはやつと氣を取り戻して、

『あなた！……』

と、兩手を擴げ、戀しかりし人に胸を訴へて、體を投げださうとする。

彼は遽かに逃げだす。

人々は追つ駈け出る。

『詩人の李さん！』

と、狂ひ叫ぶ。

メリーは氣絶して、冷たい床の上に倒れる。

彼が姿は月下に消え失せる。

さすらひの空

女關の敷石の上に、月は皎々と照らす。
復活の鐘の音は、下界の闇をついて鳴り續く。
遠くで鷄は鳴く。

中

一

今しがた、黑塗りの囚人馬車が、嚴めしい裁判所の留置場の前に着いて、馭者は鞭をおいた。

刑事法廷の前の人々は、一時に響動めきだした。

メリーは蒼白め顫へて、グランケル氏の顏をちよつと覗き上げた。

外の人たちの視線は、皆この二人の方に集まつた。

メリーとグランケル氏は馬車の側に歩みよつた。外の人々もその後について歩いた。

馬車の中から二人の看守が、勢ひよく飛び降りた。——一人はグランケル氏とメリーを見て、怪訝な顏をし、一人は眼を瞋らして、あたりの人々を睨みつけ、『退け！』と手を振つて怒鳴つた。

黴ずんだ板塀の留置場の中から、一人の看守が出て來た。

三人は『ヤー』と擧手の禮をした。

出て來た看守は、何かを潜め聲で言つた。馬車から降りた二人の看守は、『ウム〳〵』と頷で

頷づいて、彼について入つた。

馬は喘ぎ身顫ひ嘶いて、前脚で砂を搔いた。

寒空はどんよりと曇つて居る。

暫らくして、そのうちの一人が出て來た。その看守は、門の前に腕を組んで突つ立つて居る

小グランケルに驚いた。

小グランケルは、見詰め上げる看守の顔を、嚙みつくほど睨みつけた。

看守は小グランケルに何んとか言はうとした、が、彼のあまりの凄い權幕に劫えたのか、默

つて馭者の方へ歩みよつた。

馭者は馭者臺の上から、長い體をひどく曲げて、耳を看守の口先きに寄せ、默つて二三度頷

づいた。

——多分「囚人が乘ると直ぐに、馬車を全速力で馳らせろ」と言ひふくめたらしかつた——。

その看守は又這入つていつた。

それから又暫らくたつて、看守長らしい男が、口をうごめかし、眼を瞋らしてあたりを睨み

廻しながら出て來た。

小グランケルは、又その男を睨みつけた。

その看守長の男は、グランケル氏を知つて居たのか、輕く擧手の禮をした。

グランケル氏の表情の凍つた顔は、たゞ默つてその男を見詰めた。

メリーは自分の父の顔を、も一度見上げて、胸に手を握りあはして、蒼くなつて顫へてゐる。

その看守長は、『退け！、〳〵！』と、嚴めしく怒鳴りつけながら、群る人たちを馬車の側か

ら追ひ遣つた。

留置場の中で騷がしい足音が立つた。

『靜かにしろ！』

と、看守の怒鳴り聲がする。

やがて、一人の看守が出て來た。

『止まれ！』

と、いふ聲が又中でする。

亢奮しきつた看守長は、出て來た看守に

『彼處に立たんか！』

と、馬車の後を指ざしながら、甲走つた聲で指圖した。

『は！』と、その看守は、足早に其處に立つた。

又一人の看守が、囚人の先きに立つて出て來た。擧手の禮をする。

『一人づゝ、出せ！』

と、看守長が怒鳴つた。

『は！』

と、その看守は、急いで振り向いて、囚人を門内に止めた。

小グランケルはその門近くに進みよつた。

看守長は彼を睨みつけた。彼も睨みかへした。——二人の眼は殺氣立つた——。

メリーは父のグランケル氏に縋りよりながら、蒼く縮み上がつた。

看守長は『出せ！』と命じた。

一人の背の低い囚人が、編笠をかぶり、重い手錠を箝められて、一人の看守に守られながら出て來た。

人々の視線は一時にキヨツとその囚人の上に凍つた。

老婆の泣き聲が人中から立つた。

馬車の横手の看守は、『何んだ！』と怒鳴りつけた。

忽ちその囚人の姿は、馬車の中に消え失せた。

看守長は

『よし、次ぎ！』と、門の側の看守に命じた。

又一人の囚人が手錠を箝められ、捕縛繩で腰を酷く縛られて、その繩の端を握つてゐる看守から怒鳴れながら出て來た。

人々の視線は又キヨッと、その囚人の上に注がれた。

一人の若い婦人が、馬車の側に走りよりながら、泣き崩れた。

看守は『こらッ！』と、怒鳴つて、その婦人をおし退けた。

『こらッ！　早く乘らんか！』

と、手繩を持つた看守は、囚人の背中を酷く突いて、馬車の中におし込んだ。

看守長は怒りで蒼くなつて

『こらグヅ〳〵するな！』

と、門内の看守を怒鳴りつけた。

『こら！　出んか！』

と、中で看守の怒鳴り聲が立つた。

『ウーン』と深い溜息をついて、一人の跛足の囚人が三人の看守に守られて出て來た。

『詩人の李さん！』

と、小グランケルは氣狂ひ叫んだ。進みよらうとした。

それは我が襤褸服の主人公であつた。彼は編笠を重垂れ、眼をつぶつて、手には重い手錠が固く箝められてゐた。

看守長は『こらッ！』と、怒鳴つて、小グランケルを阻んだ。

彼は嚇と怒つて、看守長の手を振りきつて、又駈けよらうとした。

人々はワッとどよめいて、馬車の方になだれかゝつて來た。

看守たちはすぐ我が主人公を取りまいて、無理やりに馬車に押し込んだ。

『俺は人間のためには反抗せぬ！』

と、我が主人公は苦しく馬車の中で叫んだ。

馭者は手繩を引いて、鞭をふり上げた。

グランケル氏は、默つて頷垂れて立つてゐた。

メリーはキヨッと身動きも出來なかつた、が、

『十五年の獄窓は冷たいでせうに！……』

と、父の腕に泣き崩れた。

さすらひの空

馬は全速力で駈けだした。

『詩人の李さん！』

と、小グランケルは又叫んだ。

遠い空に、夕煙は立ちこもつてゐる。

二

厳めしかりし冬もやうやく融けて、自然の大地に春は訪れて來た。

小さい木の芽も若葉も、温かい味ひをのんで生きようとする。

枝から枝へと梢から梢へと、小さき我が自然の歌ひ手は、羽ばたき飛び廻り、舞うて囀ぎ又歌ひ、ぬくもる肌に、匹の味ひに醉ひなんとする。

小蝶の戀人は花の艶女を訪ねて、谷を渡り山を越えて、羽の痛むも厭はで、甘き蜜に醉ひ蕩れるまで、戀しき彼女が胸に抱きしめられるまで……

空のオールドミスの狂ひの雲は、胸を痛めて身を窶し、人眼を盗んでは、夜な〳〵日に〳〵、花霞の戀人を訪ねて飛んで行く。

仁旺の山は高く、廢城の松の梢にも、春は訪れて來ぬ。

一人の天使のやうな若い女性が、今しも獨立門外の廣い街道の上に現れた。

眞赤な帽子の下の、年頃を誇るべき豐艶な兩頗は、咲き出でんとする蕾の霜に痛み、凉しく清

い玉のやうな瞳も、蘭の怨みをのんで、垂れてる瞼に奇麗いに睫毛はそろつて居る。涙は半つてゐる。

右手に小さい紙片の願書を握つし、こもすると喉を鳴らして、袖に涙を拭く。足も淀む。又路を急ぐ。

高く聳ゆる虎穴山の下に泣く哀れな彼女が名は、メリーと呼ぶ。

夢にだも忘れぬ、懐しく戀しき人の住み家を、けふも訪れれば、鐵窓の獄門は固く嚴めしく、赤き煉瓦の牢壁は高く、身の毛もよだち、一月一度許す面會も、けふは許されるやら！……。赤き着物の窶れた戀人に、なんと自分の胸を告げるやら！……。

眼の前に立つは涙ばかり！　歎息ばかり！……。

メリーは鐵門の前に、ぢいッと俯向いて立つてゐる。

三

その夏の濃霧の閉ぢこもつた或眞暗闇の晩、我が主人公は息をきらして、京城からほど遠からぬ水色驛に駈けつけて來た。

彼は烏打帽を眼深に被つて、白い詰襟の夏服に着更へて居た。

狹い入口で、ちよつと立ち止まつた、が、急に改札口に飛んで行つた。

背の低いまだ若い驛員は

『あなた切符持つてます？』

と、彼を止めた。

『切符？』

と、我が主人公は驚いたやうに眼を睜つた。

驛員もちよつと眼を睜つた、が、鋏を一つカチンと鳴らし、又つれ〴〵に木柵の上を叩きながら

『彼處行つて切符を買つておいでなさい』

と、その鋏の先で、出札口を敎へた。

『買ふ？』

と、我が主人公は、仕方なしに出口の木柵から離れながら、頸を捻つて、自分の足許を合點の行かなさうに、ぢいッと見詰め下ろした。

『あなたすぐ出ますよ、彼處で賣つてますよ』

と、驛員の若者は不審さうに言つた。

『賣る？』

と、我が主人公は又頸を捻つた、が、急に出札口の方へ駈けて行つた。

いきなり

『切符ッ！』

と、叫んで、事務員の女の眼をまるくさせた。

『早く！』

と、彼は又叫んだ。

『何處？』

『汽車に乘る！……』

『エ？』

と、事務員の女は全く驚いて

『お金を？』

と、きくと、彼は當惑しきつた樣子で、

『金？』と呟いた。

が、すぐ自分のポケットやづぼんの隱しの中を、手を突込んで搜した、が、又ちよつと頭を捻つて、

『金が人を？』

と、手を休めて、合點がいかないらしく思案に暮れた。

『切符？』

と、又彼は出札口に向つて叫んだ。

『エ！　何處のを？』

『何處でもいゝ！』

と、我が主人公は又叫んで、すつかり事務員の女の膽玉をつぶしてしまつた。

『遲れる！』

と、我が主人公は臺を叩いた。

又何を思つたか、自分のポケットの中を搜した。けれども、彼の體に金などが有らう筈がなかつた。

『早く！』

と、又叫んだ。

事務員の女は、あんまりの呆れさに物も言へなかつた、が、突然

『おや！……』

と、劫えたやうに吃驚して、息塞まつた。

『あなた、詩人の李さんではございませんの？』

と、一息で叫んで、手に持つた鉛筆も落とした。

『遲れる、切符を、切符を！』

と、彼は性急に臺を手で搔きながら、嚙みつくやうに又言つた。

『先生、ごうなさつて！……』

と、女は泣きだすばかりになつて

『妾、永子でございます！　先生さま！』

と、兩手を握つて、顏を悲痛に俯向けた。

我が主人公は、急に脅えたやうに、眼をキョロッと永子の上に据ゑて、默つてポカンとしてしまつた。

『先生さま！　隨分お變りなさいました！』

と、永子は臺の前に頭を領垂れて、胸を鳴らして啜り泣きしだした。

彼は脅えた表情がそのまゝ凍つて、身動きも出來なかつた、が、だん〳〵手を臺から引いて、

逃げださうと、あたりを見廻した。

『先生さま、妾が悪うございました！』

と、女は呻いた。涙を袖でかくした。

『……』

『先生さまは、又ごちらへおいでなさるのです……』

と、女は袖を前歯でかむ。

我が主人公は默つて、溜息つく。臺をぢいッと見詰める。

『まア先生様！　妾本當に申譯のないことを致しました』

と、女は啜り上げる。

『……』

『先生さま！　何ちらへおいでなさいますの？……妾本當に先生さまに……』

と、女は涙をこらへて怨めしさうに、我が主人公を見詰める。

我が主人公は思ひ切つたやうに、急に臺から白線を上げて、

『切符を！……』

と、言つた。

『エ！　ごちらへ！……』

と、永子は驚いた。

『何處のでもいゝ、早く！　遲れる！』

と、彼は又早口で言つて、急き立てた。

『エ！ごちらのを？』

と、永子は又驚いて言つた。

『ごちらでもいゝ、遠いところを、早く』

と、又性急に臺を叩いた。

永子はごうしたものかと、默つて彼を見詰めてばかりゐる。

『早く、切符を！』

と、彼は又叫ぶやうに聲高く言つた。

永子はあきれかへり、少し怒つて

『どちらへ？』

と、棄鉢に言つた。

『遠いところ！　早く！』

と、臺を兩拳でカツと叩いた。

永子は金網を通して、まだも默つて彼を見詰めてばかりゐる。

『苦しい切符を！』

と、彼は叫んで、カツと兩脚を踏みならした。

『そんなら、妾、平壌までのを上げます！』

と、不精〳〵に切符を切つて出した。

『人間のためだ！』

と、彼は引つたくるやうに受取つて、改札口に駈けていつた。

永子は怒つて、ムツと金網を睨みつめた。

我が主人公の彼は、客室に飛び込むとすぐ、

『あー俺は生きる！』

と、叫んで、手をブル〳〵顫はして、室内の人々を吃驚させた。

『どうでもなれ！……』

と、棄口をきいて、すぐ腰掛の隅に頭を突つ込んで、帽子も被つたまゝ寢ころんだ。

『もう俺は何處へなりとも流れて行け！……行くまゝに……』

と、今まで胸一ぱいに鬱積されゐた、重苦しい溜息を吐きだした。

『社會つて惡魔の巣窟だ！……人間つて金餓鬼の變名だ！……』

と、眼をつぶつた。

『俺は魔の社會から逃れて行く……』

と、一先づ落着いたやうな安心に、彼は靜かな眠りに落ち行かうとした。

汽車は眞暗い闇を衝いて、何處となくひた走りに走りだした。

彼は車輪の音に耳を欹てた、が、

「いや俺は何處へ行かうとするのだ？」

と、彼のうちの或ものは、急に彼に聞いた。

彼は眼を開けて、あたりを見詰めた。

薄暗い車内に電燈はほうッと光つてゐる。

人々の視線は皆驚いたやうに、彼の上に注がれてゐる。

彼は忌々しく、眼を又つぶつた。

向ひに座つて居つた、一人のハイカラな男は、席を外へ移しながら、寝そばつてゐる我が主人公を、憎らしく見詰めやつて、舌をチエッ／＼と打つ。

『畜生等勝手にしあがれ！』

と、我が主人公は、眼深く被された帽子の下から呟いた。

「俺を腐らさうと、どうして俺を腐らすんだ！　人間は監獄でどうして生きられるんだ……」

と、忌々しく怒つた。

『畜生、腰掛までが癪に觸るナ！』

と、彼はムッと起き上がつて、拳を固めて腰掛を毆りつけようとしたが、我慢して

『畜生の奴等は皆俺を苦しめる！』

と、周圍の人々を憎らしく、睨みつけた。

「畜生、忌々しい！」

と、憎悪の瞬きをして、車體に背中をもたれて、又疲れの眠りに落ち行かうと、腰掛に兩脚を投げだした。

頭を窓硝子におしつけて

「俺は何處かへ流されて、又苦しい藻掻きに狂ひ廻はらうとするのだ！」

と、情けない思ひに襲はれた。

『畜生、窮窟だな！』

と、又癪を起して、體を搖ぶり捻つた。

「まアいゝ、俺はどうせ、この世から蹴落とされ狂ひ廻る者だ、死んでしまへば皆なは喜

ぶのだ、畜生！」

と、彼は暫らく捨て意地に、體も動かさなかつた。

『畜生、苦しいな！』

と、車體を睨みつけて又飛び起きた。舌を一つ打つて、腰掛の上に又寢ころんだ。

帽子は床の上に落ちた。

「俺はどうしてこんな處に飛び込んだのだ？　何處へ行くんだ？　なぜ？……」

と、彼の頭は又悶へだした。

『苦しい、俺はどうするんだ！』

と、呟いた。

窓外の遠い明りはチラッと光つては、眞暗闇に消え失せる。汽車は車輪の音騒がしく進んで行く。

我が主人公の耳には、汽車の音もなんにも聞えない。

「俺は苦しい！人間の惡魔は何處までもこの世の中を地獄たらしめるんだ！……俺を監獄

にぶち込んで、手錠を箝めさせなければ承知しないんだ！　畜生！……今に貴樣等の世界は血の海、屍の山ばかりになるきりだ！……」

と、彼の頭はグラかへつて來た。

ふと、彼は驚いて眼を見開いた。

『畜生、俺は二等車に乘りあがるな！』

と、叫んで、人々を酷く吃驚させた。

「俺はどうして、この惡魔めは！……」

と、頭を振つて、苦しく藻掻き惱んだ。

眼をつぶつて「いや」と齒を嚙んだ。もうなんにも考へまいと努めた。

反對に、又彼のうちの或るものは、急に怒鳴りだした。

「貴樣の馬鹿者め！……貴樣は二等車に乘る！……このい、加減な奴め！……飢ゑに泣く者は泣く！……我が子の飢ゑ渴きに血を吐く思ひをする者はする！　貴樣は二等車に乘つてる、汽車に乘れないで歩く者は歩く！　貴樣は威ばりたいのか？　安樂を求めるのか？

……泣く者は泣き、苦しむ者は見棄てる！……この畜生の馬鹿者め！……貴樣は狂へ！
貴樣は畜生だ！　犬や馬にも劣る奴だ！……」
と、そのものは猛り怒鳴る。
「おいこの畜生の僞善者め！　僞り者め！　人の苦と血の上に樂を求めようとする、この善法者め、罪惡に耽らうとする修道士め！　飢ゑ死にする苦しき者等の生血を啜れ、弱い者を殺し、肉を喰ひ爭へ！……。貴樣はそれが分らないのか、この世のすべてが、人々の肉と血を裂き痛まし、その苦の上にこの世の現社會が成り立つて居ることを！　又貴樣が此處に坐つて樂をして居る間に、幾億萬の人間が苦痛に藻掻き、惱みに骨肉が寢れて行くことが！　おいこの善人め！　貴樣が汽車に乘ることが爭鬪でなく、殺戮でなく、血の爭ひでなく、たゞの無機物の汽車が、わけもなく走り動くと思つて居るか！　この僞善者の惡魔め！……」
と、彼の頭のうちは焰の火煙が猛り狂ふ。全身は爛れるやうにビリ〳〵戰き慄へだした。
「あー俺は苦しい！……あー！苦しい……」

と、頭をふる。
『畜生！　社會は人間を苦しめ殺す！……』
と、彼は狂ひ叫んで、苦しさのあまり頭を車體にぶちつけた。穴の中へでももぐり込んでしまはうと、顏を腰掛に摩りつけた。
『屁を拵へるのが、人間社會だ！　惡魔の人間等だ！』
と、喘ぎだした。
眼を固くつぶつて
『神樣！』
と、叫んで救ひを求めた。
『神樣！』
と、齒をかみつけて、全身を慄かした。
室內は人々の息で蒸苦しく、電燈の光はます〳〵鈍つて來る。
『あー苦しい、あー苦しい！』

と、彼の頭からは湯氣が立ちのぼつて、呻き出した。

『いやーッ』と、彼は奥歯を噛み軋らして、

「俺は何處へ行かうといふのだ、……死のドン底に俺はどうして運ばれないのだ……』

と、彼の苦悶の頭の中には、又新たな煩悶の燒釘が飛び込んだ。

彼は無理にその苦しい燒きつく焔のグルマキから遁れるために、車輪の響きに耳を欹てようとした。けれども、煩悶の苦しみは彼にそうすることを許さなかつた。たうとう

「俺は熱してゐる、俺は熱してゐる！　苦しい！　どうか死の地獄の中に運んでくれ！」

と、彼は齧りつくやうに、胸を兩手で引攫んだ。

「悪魔の牙齒立つた猛悪な口が、俺を一口に呑んでしまへば！……それで俺は滿足だ！

人間の悪毒のこの苦痛から遁れる、人間の泣き苦しむ苦しみから俺は遁れる！……俺は又捕へられれば、牢獄にぶち込まれる！　俺は生きようと、又破獄して逃げだす！……しかし俺はどうしても生きられない、人間の悪魔は俺を殺さなければ止まない！……」

と、喉を引ッ攫んだ。

それでも頭の中は沸きかへる……。

「人間社會！——その悪魔！　強き者は弱き者を苦しめ、金ある奴は肥え太り、金のない奴は飢ゑに苦しみ、弱い者は虐げられ、或者は獄にぶち込まれ、或者は叫び、或者は泣き、或者は殺され、或者は切られ、或者は傷つけられ、人間の肉は爛れ、自然の黄土は眞赤に血染まつて赤土と化し、幾萬の屍は日に日に斃れ！……あー人間！……それは悪鬼！　吸血獣！　あー人類！……人生！　鬼！　その魔物は何處までも、その残酷極まる殺傷と鮮血と凄惨な爭ひを止めはしない！　全世界の幾億萬の人間は皆泣いて居る、一人も安らけきも平和も樂しみも得られない！……ごうして人間！　何がために人類は、その残忍きはまる兇行を續けようといふのだ！　血腥い、惨たらしい、俺は狂はしい！　俺は今監獄から逃げて來た！　いや俺は馬鹿だ、監獄は却つて安全地帶だ、毎日の生存の爭闘もなく、残忍の殺傷はたゞ絞首臺と服役に、腐り行く血と肉ばかりにあるのだ！　相互の殺戮はない！　俺はなんたる馬鹿者だ、社會は大なる監獄だ、大なる虐殺が行はれる所だ！　俺はその残忍を厭ふ、人間は生きなければならない！　いや俺はこの残忍なる社會に歸つたの

だ！　俺は苦しい！　俺の頭に熱は增して來る……。俺は蒸苦しい、俺は今に氣が狂つてしまふ……」

と、彼はます〳〵藻掻き苦しんで、罪惡に戰き慄へた。

『あー、俺は苦しい！』

と、彼は又呻いた。

「なぜ人間の奴等は、自分が苦しみ、自分で自分等の慘劇の淺間しさに顫へ上がりながら、その凄ましい、殺肉搾血の慘劇を止めようとはしないのだ！……」

『あー神樣！　人間は何處までも殘虐なのですか、人の血を飲まなければ生きられないのですか、眞赤な血潮の塊を見なければ氣がすまないのですか、呻らなければならんのですか！……神樣！……皆共斃れすることは！……』

と、物凄く戰き、身の毛もいよ立つた。

「……あッー、せめて俺は死んでしまへば、惡魔が俺を殺してしまへば！……あーそうしたら、せめてはり裂けるばかりの此の頭の惱みから……苦しい胸の焰から、俺は少しなりとも遁れることが出來るだらうに！……」

『あー神樣！……』

と、彼は凡ゆる人間たちが惡魔のやうに憎らしくなつた。その惡辣なる僞善の智慧もて造りなして居る社會を打壞してしまひたかつた。

神が恨めしかつた。

齒を固く嚙み軋しらした。

その時彼は又、その藻掻きの苦しみと全然反對な、他の苦しみに飛びつかれた。

「いや、俺もこうした苦しみの人生の中に死ぬ、又外の人も同じやうに死ぬ——すべて人間は、斯うした人間相互の殺伐の苦しみの中で死に終る……そうなるがために皆喚き騷いで居る——」

と、そのものは叫んで、彼は、ごうかして此等苦惡な人間社會から自分が生き延びよう。殺伐なき完全社會を夢見よう。すべて死ぬ者をすべて救ひ出さう。ごうかしてこの世から苦痛と悲慘とを取除けよう。人間のうちから、ごうしてその殺伐なる殘忍性を滅ぼし消え失せさ

せようか、と思ひ煩つた。

しかしたうとう彼は、

『それは出來ないことだ』

と、苦しく呻いて、拳を握りかためた。

「死と殺とを前提とした社會においては、勝利と自己と他人とを認める世界においては、物質を神の物たらしめず人間の有たらしめ、神のための人間の生命に用ひず、自己の有する物に城壁と自己の生命を獻げようとする世の中においては、到底出來ないことだ！」

と、彼の頭はクラかへつて、又車體に打ちつけた。

「敗慘と被殺と傷害と苦悶と涙と叫びとを認めなければならないから！……」

と、頭のうちに火花が散つて怒鳴り叫び續けた。

「神は人類の心の奥にひそまつて、小さく、現在には用のないことである、と人間は思つて居るから、人間は心の奥の良心の働きを何處までも否認し、その現はれを厭ひ、殘忍と暴虐とを逞しうしようとするから！……。良心の叫びを罪惡だと怒鳴り、縛り、監獄の牢

門を高く築き上げるから！……」

と、炎々と煩惱の焔が全身をあぶり燃え上がつて、彼は又

『あー苦しい！　俺はこの苦痛から一ッ時でも遁れたい！』

と、喚き叫んだ。

車内の人々は、又吃驚した。

「こうした世の中では、二つの途に一つがある。——勝利でなければ滅亡」であり、自ら闘つて殺しあひ、勝たざれば自滅の路を急いで逃げる……」

と、彼は沸きかへる煩悶の苦熱から遁れようとした。

「そうだ、自滅は自分の苦痛を滅ぼすがためにも、生命の息を早く縮めるがいゝんだ」

と、或ものはすぐ、彼の狂ひの自殺に肯定した。ところが他のものは、

「しかし俺は、この世の殺傷の百鬼夜行の物凄さに逃げることだ！　人の殺傷に震へ上がつて、その流血の巷から遁れることだ？　敗慘の人の涙の、貰ひ泣きの苦しみに、泣き叫び、喚き立て、その苦痛に自滅の路を急がうとする。神に訴へて、人間の生と自己の生に

再び歸らうとしながら、又逃げ續けて居る！……』

と、痛みの焰を盛り上げた。

彼は又その苦悶の痛みに堪へきれず、顏を酷くしかめて寢ころんで居る體を捻つて悶へた。

頭はます〳〵蒸苦しく、何かに力任せに打ちつけて、破つてしまひたいほどであつた。

「いや人間は棄てられたまゝに、其處に棄てられてあるんだ。死がある筈がなく、生がある筈がない！」

と、彼は、あまりの苦しみに藻掻き惱まされて居る自分を、不憫さうに顧みながら慰めようとした。

又齒をかみつけて、兩拳を顫はして、

「人間は何處までも生きることだ！　俺も他の人と同じく現世的に生きることだ！」

と、言はうとした時、彼は急に或る自分以上のものから押へつけられた。

そのものは、毒辯と讒謗と罵詈と嘲笑の毒々しい刄の限りをきはめて、叫び續け突擊しはじめた。

「そんなら貴樣は當前のことして殺伐を認める、傷害を認める。自己と他人との區別と物質の城壁を認める！……」

と、彼の心は狂ひの焰を增した。

苦悶の劍戟のかちあひの火花と懊惱の突擊の狂亂は、紅蓮の煙をまき上げて入り亂れた。

幾萬の悶軍は怒濤の如く喚き叫びたつた。

全身の毛を逆立て、慄き寢ころんで居る彼の體からは、炎々と苦悶の湯氣が立ちのぼり、七轉八倒の苦しみに、彼は兩手で自分の頭を鷲攫みに攫んで縮み上がつた。

「……それがどうした譯だ！　貴樣も眞向ひから人を切り込んで行かうとするのか！　白い生き〳〵した人間の肌に、生々しい血煙をパッと散らし、それよりも、一人の男を——又は無數の人々を——ヂリ〳〵と燒き焦がすやうに、干乾ばし陰乾しにして、骸骨になるまで、金の魔法で、枯乾し殺さうとするのか！……。なんと貴樣は殘忍だ！　なんと貴樣は獰惡なる魔物だ！　極惡なる烙鬼と五十步百步だ！　いやこの餓鬼よ！　貴樣は！……むしろ人間社會は、惡魔の地獄よりも慘忍だ！　惡魔は罪を滅ぼす！　貴樣等人間は靈を亡

ほし、罪を造る！　ごんなに貴樣等は極惡なる惡魔以上の惡魔だ！……それに口には神を唱へて、行ひに罪の刃で切りつける！……。あーこの餓鬼め！　貴樣もが……俺は、貴樣を狂ふ靈の一人の人間と思つた。然るに貴樣はなほ罪の餓鬼であつたのか！……貴樣には、それが自家撞着であることが分らないのか？……知つてごうして貴樣も又血に飢ゑ渴かうとするのだ！……」

と、彼の心裏の奥底の暗いこころにかくれてゐた、威嚴ある恐ろしく淸いものは、苦悶の彼に、メスの如く鋭く怒鳴り込んで來た。

一時に全身には、パッと戰慄の火花が散つた。

「……そうしたあらゆる自滅的人間を認めて、兇暴極まる殺傷を行つて、人間は生き長らへよう、永遠を夢見よう、幸福をまし得ようとするのか？　それが全くの矛盾でなければなんだ？……。

棄られてあるから、棄られたまゝに居るといふのなら……先づお前は喰はないで生きることだ。この世の中で喰ふこと自身は、既に爭鬪と殺傷との結果で、勝ち得た者にばかり得

られるものだ！。人の血の後で、自己の命を繼ぐべき、たつた一粒の米なりとも得られるのだ。それがごうして無殺傷と無競爭で得られると思うか！……。

たとへお前が棄てられたまゝなりとて、自己防衞と自家保壘とを築き上げず、又自ら進んで人を傷つけないと、辯護せうとするかも知れぬが、それは詭辯か誤解だ、そうでなければ奸惡なる僞辯だ！　喰ふことそれ自身が、つまりお前の命を、この世で生かさうとすることは、人の血を啜らうとすることだ！　ごうして爭鬪がないと言ひ得るんだ！　又ごうしてお前が劍を握らぬと强辯することが出來るのだ！……若しお前は棄てられたまゝと殺傷を厭ふなら、死は其處にお前を轉がすことだ！……。人生はすべてが戰鬪だ！……」

と、彼はこの激しい抗議の突貫に、全く全身の氣力を失つて頭痛の苦熱はまます〳〵彼を焚き焦がした。

彼は苦しさのあまり、一切を苦悶の中に投げ出してしまはうとした。そうするより外にごうすることも出來なかつた。

『あー！』と、齒を嚙みならしながら

「人は俺を傷づけても、俺は人を傷づけることは出來ない！　俺は死を求めよう、死を待たう！……」

と、彼は喘ぎ呻いた。あらゆる現世における人生の慾望を棄ててしまつた。そうして又頭を振つて、體を震ひ慄かした。

『死を待たう！』

と、又齒をかみしめて、苦しく呻いた。

「死を待つ？、いや待つては居られない……」

と、或ものが突然又横やりから叫んだ。

彼は體をぞつとさせた、『アッ！』と、激しい痛みのあまり叫びださうとした。が、すぐそのものは、彼の喉を引つ攫んで

『一ッ時も早く死ね！』

と、速刻の自滅を叫んだ。彼をおしつけた。

「この世で人間は殺されることだ！　獣悪が生きのびることだ！」

と、そのものは又叫んだ。キュッと彼の頭をメスのやうに鋭く突き刺した。彼の魂は、パッと一時に彼の全身を照らして、炎々と苦しく燃え上がつた。

『死！　死！　死が欲しい、死はやさしい！……』

と、彼は叫んだ。

「しかし俺は死なれない……」

と、又苦しんだ。

たうとう彼は苦しさのあまり、

『俺はどうせうといふのだ？』

と叫んで、すべての自己を投げ出さうとして、一層苦しみで呻いた。

眼の光も狂つて、彼は又力まかせに體を後の車體に打ちつけた。握り拳で自分の體を打つた。それでも苦しかつた。頭を叩いた、毛もない髪を拐らうと焦つた。

『ウーン』と、物凄く唸つた。

急に彼は、自分が絶望の深淵に陥つて居ることに氣付いて、意識がぼんやりして行つた。何

處か深い暗黑のドン底に、自分が落こし入れられて居るのだ、と彼は思つた。そうして、その恐ろしい暗黑が、凄く慄きふるへる魔の毛を逆立てて、自分の周圍をだん〳〵取りまき狹ばめ、酷い强壓力で彼をおしつけ、恐怖の戰慄を增して、息も生命も體も何もおし込めて、たつた一點の生命の火をも、だん〳〵小さく消え細らせ、最後の一閃までも取押へて仕舞はうと、壓し迫つて來つゝある恐怖に、彼の全身は、暗い腰掛の上で、物凄いほど慄き、ブル〳〵縮み上がつてゐた。

室內は闇が一ぱいおし迫つて、人々は物凄い恐怖につかまれてゐた。

汽車の車輪の音も魔の響きのやうであつた。

闇の夜息に呑まれた車內は、ほうッと光る電燈の光も物凄かつた。

窓外の遠くで、チラッ〳〵と光り過ぎ行く明りも、魔の點火のやうであつた。

彼は勇氣も力も、皆死の魔に奪はれて、たゞ死を待つて、肩まで酷く頭へ縮み上げた。

彼のうちの生命の火は、殆んど名狀することの出來ないほどの恐怖の中で、ます〳〵細く押し込まれ行きつゝあつた。

彼の體は苦痛にたへきれないで、見る眼も痛ましく、恐ろしく恐怖に震へて、齒を固く喰ひしばり、顏は眞蒼に死色に劫えかたまつてゐた。

彼の靈は人間社會の殺傷と爭鬪の殘忍に顫へ、血を飲む人間の恐ろしき罪惡の苦痛に慄き、最後の炎々たる焰と火花を散らして、肉をも心をも何ものをも壓し碎し、燒き焦がさうと猛り狂つてゐた。

窓外の闇は魔のやうに窓を押しつけて、室內は陰鬱な夜息でかたく滿たされてゐた。

遠くで魔物のやうな光がチラッと現れて、汽車をついて走つたが、忽ちピカッと消え失せた。

車內の人々は皆暗い隅に、物凄く手足も慄き縮まつてゐる我が主人公を見詰めて、息も塞まりさうに縮かんでゐた。

しかし誰も、我が主人公が、なぜ苦しく呻き惱んで居るのかは知らなかつた。

死の叫びの人間の良心の慄きと、魔の恐ろしい威力の——一時に大油田が爆發し燃え上がるやうな——いやそれ以上の——苦悶の紫焰紅焰が燃え上がつて居ることを、どうして、物に賣られた物質の奴隸の黑鬼たちが知ることが出來よう！　吸血鬼の——子は親の血を啜り、

親は子の肉を喰ふ、人間の惡魔等が、ごうしてそれを知るこゝが出來るこいふのだ！　殺傷は人間の鬼の、物質に對する忠僕の働きなのだ！　金錢に殺される人間は、血と肉を喰ひ啜らなければ、生きられないのだ！……。

汽笛の音が、何處か遠く〳〵の別世界の深淵の暗黑の外から聞えて來るやうに、彼の耳にこゞいて來た。

彼はやうやく意識に戻るこゝが出來たのか、手足がビリッ〳〵伸びながら、暗い中で物凄く動いた。

頭を激しく振つて、全身をブルッこ顫はせ、齒をキューッこ――人々の體がぞつこするほゞ――凄く噛んで、『ウーン』こ唸つて、溜息を吐きだした。

突然、腰掛から起き上がつた。

又頭を振つた。

ヌーッこ床板を見詰め下ろした。その視線は怒りの睨みこかはつていつた。

頭からも體からも熱苦しい湯氣が立ちのぼつてゐた。全身はビッショリ苦悶の膏に滲み濡れ

て、又慄きだした。

彼は床の上に落ちてゐる帽子を、幽靈のやうに眼玉をまるく尖らして睨みつけた。

『吸血め！　人殺しめ！』

こ、いきなり叫んで、帽子を滅茶苦茶に踏みつぶして、手足をブルッこ震はしたが、又ドーッこ腰掛の上に倒れた。

苦しい呻き息を吐きだした。

『俺はごうせうこいふのだ……！』

こ、眼からは涙が流れ出た。

「俺にはすべてが抛擲だ！　なるがまゝになれ、死ぬがまゝに死ね、生きたけれや又生き戻れ、ごうせ流され狂ひ廻る俺なのだ、ごうでもいゝからなるがまゝになつて見ろ！……俺は分らぬここだ、死はなんだ、生はなんだ、畜生！　そんなここがある筈がない、人間つて何んだ、そんな馬鹿者等の化物が何處にあるんだ、惡魔は俺を搔きむしつて行け、牙齒立つた齒で俺を咬みつぶしてしまへ！　それで俺は滿足だ！……」

と、頭の中が又クラかへつて、彼は起き上がつた。
頭をブルッと震はした。
腰掛をヌーッと睨みつけた。
むしやくしやに搔き亂されてクラかへつて居る頭を、兩手で鷲攫みに摑んで、力任せに引つ裂いてしまはうと、齒を嚙んだ。顏を苦しく顰めて、『ウン〳〵』唸つた。
急に窓硝子の前にすりよつた。
外は眞暗い闇である。
「蒸苦しい！　惡魔ッ！」
と、その硝子窓を叩きつぶさうと、ムッと兩拳を握りしめた。
急に劫えて、ワッと泣きだすばかりになつた。
「なんて俺は！　なんて俺は！　なんて俺はこんなことをするんだ！……」
と、ブルッと體を顫はして、頭を重く頷垂れた。
眼からは苦しい涙の粒が滲み出た。

「人間！　人間！……あー俺はもう人間に飽いた。俺は自身にも飽いた！」
と、兩手を胸に束ねて、窓から力なく體を引いた。腰掛に體をもたれて氣を失つた。
暫らくは汽車に搖られるまゝに搖られてゐた。
殘酷に瘠せこけた骨ばかりの顏は蒼白く、齒にカタッと喰ひしばつてゐた。
苛酷な皺が深く刻まれてゐる額には、苦悶の汗が一ぱい滲み出されてゐた。
殆んど二時間も——それから停車場を三ッ四ッも越した後まで——彼は息もつかれず、腰掛の後の臺に頭を後垂れてゐた。
やうやくのこと、彼は惱み狂つて鬱血した眼を、白つぽくヌーッと開いた。
彼は頭をやつと起き上げると、キューッと物凄く人々を睨みつけて、眼に映る車内の人たちが憎らしく、恐ろしく敵愾の憤憤が一時に燃え上がつた。
「畜生ッ！　奴等が俺を殺すんだ！　憎らしい！　人間の奴等は皆俺を殺さうといふのだ。
奴等はお化けの顏を持つてる。温しい人間の顏をしてるが、心のうちでは獰猛なる惡魔の毛だらけのこわい手の爪を尖らして居る。人面獸心とは奴等のために作られた言葉なの

だ！……奴等は恐ろしい！　人間の魔は恐ろしい！　眞黑な惡魔ッ！」

と、彼の體は憤慨で慄き、熱しきつて全身に勇氣をこめて、敵愾に血走つた眼で、車内の人々を又凄く睨みつけた。

彼は假面の人心を繕らうて座つて居る獸物の人間たちを、いきなり立ち上がつて皆撲り殺してまひたかつた。

人間社會に有りとあらゆる殘酷なる罪惡極まる獸性を、巨人のやうな鐵腕を振うて打ち毀してしまひ、多くの善良な心の芽と、萬人共樂の生の歡喜とをこの人間社會に植ゑつけたかつた。何んとかして人間のうちからその魔性を滅ぼして、人間本心の嗤きの光明が、黑い獸性を追ひだして、白い透明な靈肉の人間に歸らしたかつた。

彼の怒り猛つた眼は、その獸惡きはまる車内の人たちを睨みつけて、その者等の罪惡の恐ろしさに、又ぞつと體が顫へた。

それ等假面の人心を繕らうて居る獸物等の人間の中に取りまかれて居る自分は、體から、骨も肉も減り行くやうで、苦しくつて居たへられなかつた。

一ッ時も早くその惡魔等を打ち殺してしまひたかつた。

彼の怒り猛る眼が、周圍の人々の視線とぶつつかる毎に、彼はます〳〵敵視の情がムラ〳〵と沸き上がつた。

カッと怒り狂つた彼は、今に飛び上がつて、車内の人々を撲りつけようと

『畜生！』

と、憎惡の拳を固く握りしめた。

突貫の血潮に全身をブル〳〵震はした。

獸惡な人間等の上に血の雨を降らさうと、兩足を踏んばり、唇をかみしめて、兩腕をブルブル鳴らした。

突然跳り上がつた！　車内を暴れ狂ひ廻らうと握り拳を振り上げた、全身はゾック〳〵と惡寒が迸つた！　眼は獰猛に光つた！。

瞬間、突然！

「お前は何をするんだ！　神は彼等のうちにも眠つて居る！　惡魔が肉を腐らして居る！」

と、恐ろしい大きい聲が火花を飛ばして、天地も搖がすばかりに、彼のうちで怒鳴つた。
すぐさまその聲の主に取り押へられてしまつた。
憐れな彼は、見るのも痛ましいほど、忽ち恐怖病者のやうに眼を遠くへヌーッと据ゑて、兩手を伸ばして恐ろしく藻掻き、全身を——頭の頂邊から足の爪先まで——ブル〳〵震はして、ドーッと腰掛の上におしつけられて倒れた。
やがて絶望的に頭は重垂れた。
苦しい息は、間もなく唸るやうに彼の鼻から吐き出された。
それでも彼の心内の怒鳴り聲は、まだ續いてゐた。
「貴樣は何んといふ氣狂ひ者だ！　人を打つ？　人を毆る？　神を打つ！……人の靈を殺す位なら、なぜお前は狂ふんだ！……。世の中で生存競爭てふ殺伐を續けれやいゝぢやないか！……人を殺せ！……それにお前の敵はお前自身であるのだ。お前の內にあるのだ。……貴樣が怒る、藻掻く、狂ふ、そんなことが皆んな何んになるといふのだ！……貴樣自身が勝手に怒り狂ひ、藻掻くことだ！……」

と、彼は體も微かに慄いてゐた。
車內の人々は皆恐怖にゾッと驚き震へ上がつた。眼がまるくなつて、彼を發作的狂癲病者だと思つた。
蒸苦しい息にほやッと光る客室は、固い沈默の闇が取り包んで、恐怖の戰慄が一ぱい震へてゐた。
人々の恐怖の瞳は、互に見詰めあつて、何かを問ひ返へしては、又隅つこの呻き息の我が主人公の上に注がれてゐた。
魔物の襲來するやうな機關車の音は、人々の膽玉までも恐怖に慄かした。
「そんなことが皆んな何んになるのだ！　この世はすべてのものが暗黑の闇の中に包まれてゐるのだ！……。」
と、彼は力なく呟いて、
「なるがまゝになれ……」
と、棄口をきいた。

さすらひの空

「……畜生の餓鬼の人間め、勝手に色んな名目を付けて、自己の罪惡を隱さうとする……」

と、彼は又藻掻きだした。

「奴等は俺の肉を喰はなければ生きられない……勝手に俺の血を啜れ！……フン……奴等、好いことを考へてる。それが物品の賣買だとか、商賣だとか、金錢の利便だとか……まアい、……糞ッ！……それが生存競爭だとか……勝手にしあがれ……自己だとか他人だとか、同種族とか異種族とか、自國とか他國とか……畜生の奴等、旨い智慧だ。旨い地獄行きの騎手たちだ！そうして皆んな人間を殺しッちまへ……今に、獰猛な貴樣等の心の奥の獸物等は、貴樣自身をも皆んな喰ひ盡してしまつて、人間の形もこの地上に殘さない時が來るから、その時は、貴樣等はさぞ滿足するだらう……！　それで貴樣等はそれが人間の智慧だと誇るだらう！　それを神の託宣だと思ふだらう……神樣もえらい御迷惑だ！畜生等め！……」

と、彼は開いた眼を、又つぶつた。

そう忌々しく言ひ終ると、重苦しい胸が少しは輕く、スーッとして來たやうな氣もした。

それで彼は心身の疲勞に眠りつかうとした。

が、彼のうちに嵐立つて居る憎惡と敵視と良心の狂ひの叫びとは、なか〳〵彼をそうした慰安に、一分間なりとも自由にしてはやらなかつた。或は叫び、或は猛り、或は追求し、或は突擊し續けた。頭は又沸きかへつて來た。

「なんとお前は馬鹿だらう……」

と、そのうちの或るものが、冷やかに嘲笑つて言つた。

「お前が憎惡に燃え敵視に焦げるとはなんだ……なんとお前はまだ人間臭い……どうしても人間はその獸惡性から遁れることは出來ないのか……人間、人間、それはなんと罪深いものだらう」

と、その聲が罵つて止むと、又彼の心の中には、凡ゆる狂亂と混戰と劍戟と叫びとが、狂ひ逆つた。

彼は苦しまぎれに起きあがつた。

頭を激しく振つた。しかし少しもその苦しい藻掻きば、彼を助けるために振り落ごされなか

つた。

窓框の側に體を引きよせた。外を眺めた。

暗澹な魔の闇は、彼の靈までも呑み込んでしまはうと、一層酷く彼の頭を重苦しく悶へ狂はした。

彼は體をぞつと震はして、窓硝子から顔を背けた。

車内の人々を睨みつけようとしたが、それ等の人たちの獰惡なる獸性に、全身に惡寒が又ぞつとして、どうしても彼は顔を向けることが出來なかつた。

彼には室内に座つて居る人たちが、皆魔物のやうな感じがして、又體中が慄きだした。

彼はいきなりその客車から飛びだした。

扉から出ると、涼しい夜風がサッと、藻掻き苦しい彼の面に吹きよせた。ホッと息を吐いた。

急に胸がスーッとして、はじめて生の思ひがした。

力を失つて眼をつぶつて、頭を仰向けに、後の重體にもたれ立つた。

外はぼうッと白らけだしてゐた。

撫で來る風の冷やかな小足に、鐵火のやうに燒かれて、熱苦しい頭を彼は冷やして、細く、何處までも優しく顔に降り注ぐ雨の涼しさに、彼は再び自分の生に甦り、次第〳〵に體の熱をさまさうと、その涼しき味をぢいッと味はふた。

「汽車は進む、あの車輪の音高く。我は運ばれ行く。涼しい〳〵〳〵!……」

と、彼は靜かに快感を味はひながら呟いた。

何時までもその涼しさを、藻掻き苦しかつた自分から、取り逃がしたくはなかつた。

「涼しい〳〵! 俺は再び生きかへつた!……」

と、彼は瞑想がちに、その涼しい甘さの中に眠り行かうとした。

しかし間もなく彼は、自分のこの甘い感情が嘘僞であることを發見した。

實際彼はまだ熱苦しく悶へ惱んでゐるのであつた。幾多の惱み苦しい叫び聲は、彼の頭の中でゴッタかへつてゐた。——或る叫びは生を肯定した。或るものは否定した。又或るものは憤怒に猛つてゐた。他のものは優しく疲れて、眼に涙をたゝへてゐた。又或恐ろしいものは眞向から

「すべてを抛擲しろ！」

と、怒鳴つてゐた。

彼はどうすることも出來ない――それ等のもの、叫びと、それ等のもの、恐怖と戰慄と憤怒と狂奔と興奮と、又優しい感情にもろい涙のそゝろぎに……人間の罪深い身の、暗黑な奥底から輝きだす良心の火玉の猛りに――彼は自分のすべてを任かさなければならない。白い青春の肌をも、人間の罪の慄きに燃え焦がされなければならない――若々しい血をも、オド〳〵しい童貞の心をも――。

思へば悲し、彼の眼には涙が溜る――同じ、この世の惡魔の人間と生れて、なぜ彼ばかりは、どうしてこんなに良心の閃きに苦しまなければならんのだらうか？……

――社會からは追ひだされ、我が身からは裏ぎられ、生には叛き、痛ましい胸は烈火の焰で狂うて居る。頭は湯氣が立ちのぼるほど熱しきつて居る。五體六腑の體は、炎々と燃え狂ふ煩悶の焰に、血も膏も焚き焦がされつゝある！――。

「せめて俺に、一滴の命の水が欲しい、一吹の涼味の風が欲しい！」

と、彼は苦しくも、涙ぐましかつた。

「あ！　涼しい、あ！　涼しい！……」

と、又無理に言ひ續けて、そよ吹く風と濡らされる顏の雨に、肉體の生を叫んだ。肉の甘きを味はうとした。一つ時なりとも心内の煩惱の藻搔きから生の甘さを求めようと……。

しかし彼は忽ち苦悶の幾萬の叫び聲に、怒鳴られ、嘲けられ、苦しめられ、蹴落とされてしまつた。

「お前は奸物だ！　お前は僞善者だ！」

と、それ等は一時に聲をそろへて叫んだ。

「お前の體は、今悶へ苦しんで居ることを、お前は知つて居る。熱しきつて居ることを知つて居る。外部の雨や風が、お前の靈を慰ひ慰めることの出來ないことをも知つて居る。それだのにお前は嘘をついて居る。又それにお前は、何んといふ叛逆者だ。お前の良心を裏ぎつて居る。お前は何もかもを抛擲しなければならないことを知つて居る。すべての望みと甘さから遠ざからなければならない。それだのにお前は、甘さを求めて居る。甘き蜂蜜

はお前には消え易い。恐ろしい良心の火玉は、お前に永遠の生命と永遠の甘さを與へる！……」

「あー俺はごうすればいゝのだ！　苦しい！　苦しい！……

熱しきつて居る、燃やされて居る、今に俺は狂つてしまふだらう！　全身が炮烙の黒焼きになつてしまふだらう！」

「あーせめて、この自分の苦しい藻掻きの熱火から、一時なりとも遁れたい。我が肉は焼きたゞれてしまふ、千切れてしまふ、焦がされて仕舞ふ！……あー苦しい！　俺は！——肉體からは裏ぎる者と呼ばはり惱まされ、膏血は絞られ。良心からは叛逆者と苦しめられ、焼かれ、震へさせられ……」

と、苦しい彼は、痛ましく頭を車體に摩りつけた。

「あー神様！　わたしはごうしませうか？　生きませう？　死にませうか？　踊りませうか？　立つてゐませうか？　座つてゐませうか？　あゝわたしはごうしませうか？……人間からは生存の及物で切りつけられ、社會からは仇者扱ひせられ……あーわたしはごうしませうか？　今では眼からは涙も出ません。乾いてゐます。泣くにも泣かれません」

と、彼は苦しさのあまり、顔を悲痛にしかめる。足を踏み鳴らす。

「あーわたしはごうしませうか……？　鐵道往生は肉が許しません。靈も叫びます。喰はんで生きるにも、血が乾いて飢ゑに勝たれません。そうかといつて、喰ふには殺伐が眼の前にちらづきます。一人の暴力が一人の血を呑み盡さなければなりません。靈が許しません。神様！　あなたが泣きます！　あーわたしはごうしませうか？」

と、涙は流れる。胸は苦しみで一ぱいになつた。彼は昇降臺に打ち倒れた。

ごうすることも彼には出來なかつた——生とも死とも定められなかつた。

しかし狂はしい叫び聲は、彼のうちで依然と叫び續けてゐた。

夜明けの汽車の音は騒がしく進んで行く。

細雨は繁る、どんよりと曇つた雲は、かたく彼を包んでゐる。

誰も苦しい彼を構ふ者はなかつた。

汽笛の音が鋭く鳴り響いた。

さすらひの空

彼は急いで起き上がつた。

汽車は何處かの驛へ進んで行きつゝあつた。

彼は突然客室の中へ駈け込んでいつた。

床の上に踏み潰されてある帽子を手早く拾ひあげて、慌たゞしく又飛び出た。

彼は停車するまで待つてることは出來なかつた。胸が苦しかつた。いきなりプラットホーム目掛けて飛び降りた。激しく地べたに投げ出された。

それでも熱しきつた彼は、すぐ夢中に起き上がつた。

急に彼は全身の熱がズーッとさめて、眼がパッチリ開いた。眼の前がハッキリして、氣が爽ッとした。

『あハー』と、彼は笑ふやうに、胸に閊へた溜息を吐き出した。

あたりを見廻した。

汽車は停車もせずに煙を吐いて遠くへ進んで行く。

その機關車の音も勇ましく聞えた。

彼は吹き飛ばされた帽子を皮肉さうに取り上げて、輕く爽快な氣分で出口の方へ進んで行つた。其處は山奥の小驛であつた。

彼は驛員の男に輕く笑つて、切符を渡して出て行かうとした。

『いやあなたは何處へおいでになるのです？』

と、驛員の男は、いきなり彼に喧嘩がましい口調で、切符を受取らうともしない。

彼は默つて切符ばかりをその男に突きつけてゐる。

『いやそれは出來ません、此處は途中下車驛ではありません』

『下車驛でないから出來ない？』

と、彼は少し興奮していつた。

『あなたは何處から乘つたのですか、其處から此處までの賃金を別に拂はなければなりません』

『賃金！　金？』

と、彼は落着いて、忌々しく、しかも皮肉らしく、獨言のやうに言つた。

『そうです』

と、驛員の男は、きつぱり、それを知らぬ馬鹿が居るかと言つた調子で答へた。

彼は自分の考への筋を辿りながら、口をちよつと歪めて

「……人間社會はこうだからいけない。何處までも人間を縛つて見たい、こんな小さいこまでも。途中下車驛とか下車驛でないとかを設けて、しかし金の鬼棒なら免じてやるのだと……」

と、一人で苦笑した。

『そんなら出られないといふのですね?』

と、彼は皮肉さうに言つた。

『勿論です』

と、驛員の男は眼を瞋らす。

彼は驛員の男をチヨロ〳〵見詰めながら、鼻で「フン」と笑つた。

——金に使はれる人間としては、如何にも應はしい男だと思つた——。

「お前等はお釋迦樣の使ひにはならないが、苦しめるこの御大將閻魔さんの使ひなら何時でもすると、出て行つてはいけない、縛つて見せなければならないつて、勝手に縛りあつて見イ、爭ひ鬪つて頭を割つて見るがい、……しかし、奴お門違ひだぞ、俺まで金の道化役者にせうといふのだな……馬鹿!」

と、彼は——これはお前等の爭ひの道具だから——と、驛員の男に切符を投げつけて、いきなり出口から飛んで駈け出した。

『すべてこの人間社會から逃げることだ!』

と、叫んだ

驛員の男は、後から何んとか怒鳴り呼んでゐた。彼は又「フム、面白いなア」と思つた。

「おい人間の野郎め、怒鳴つたり爭つたりするのは、お前等人間社會での衣食の法なんだ。仕舞には殺しても殺されてもだ……」

と、彼は一席皮肉つてやらうと思つたが、先づ三十六計逃ぐるに如かずと、走り續けた。

「いやどうして俺はこんな處でも走つて居るのだ。この自然の中に、この香りの中に……」と、彼は急に立ち止まつて邊りを見廻した。

一面は自然である。生き〳〵した生氣充ち滿ちた香りである。見渡す限りは、眼のとゞく限りは、青々たる草葉の海原である。或は高く或は低く、又廣々と……。

彼は眼の前のこの鮮かな一面の青緑に、眼を見はりながら安心の吐息を吐きだした。頭がす〳〵して胸が爽々しく、シーンと或る無限の靈氣の香りの中に、彼は融けこまれて行きながら、靜かな祈るやうな瞑想の瞼を閉ぢた。

「どうして俺はこんなところでも走つたのだ。此處は自然だ、人間社會ではないのだ！」と、呟いた。

自然の香りに醉ひ疲れた眼を徐かに見開いた。自然の力に支配されて、神秘の如く、彼の全身は涼しく靜まりかへり行きつゝあつた。

右手にはこんもりと茂つた夜明けて間もない森が、彼の來るのを待つて居る。前は、遠い山は藍に淡霞み、近い山は緑を染めて居る、又時には赤黄ろい土の肌を見せて居る。少し低く谷

になつて居る一寸上には、細い長い帶のような路が見え隱れして居る。

「多分あの路を通る者は、この美しいゆつたりした自然の懷に戀して、その温かい真ましき露の甘さに醉ひ舞ひ出さうと、夜通ふ小鳥か仙女ばかりだらう」

と、彼は近山のその路を又見惚れて微笑まされた。

又自然に醉はされて、ウットリとした瞼を除かに閉ぢた。涼しき自然界の如何に清く生き〳〵しく、又香りに充ち滿たされて居るかを瞑想し、生に微笑まされた。

眼を開いて自然に又見惚れた。

左手の一面の野原は、青々たる稻葉が眼さめて、生き〳〵しく自然を讃美し、神に感謝して生え上がつて居る。

彼はうつとりとその自然の甘さに、見えざるその大自然の若々しい生命の泉に浸たされ、我を忘れて立つて居る。

彼が面を、時々撫舞うて來る、涼しい木の葉かへす薫しい小波の風に、その廣い一面の稻田のもろ〳〵の稻草の——近きは畔路を見せて艶つぽく、遠きはたゞ青緑に、遂には霞と消え

去り、眼のとどかぬ彼方までも、地の續く限りに續いて居る――その素直に小さく生え上がつた葉の手を奇麗いに動かして、次ぎから次ぎへと友を招いて風のそよぎを送つて居る、その眼界を滿たす限りの廣い青田のうねりは、近くから遠くへと、太洋の蒼波を搖りかへすやうに、だん〳〵遠くへと波かへり進んで行く。その無限なる神の愛と柔和を象つた稻葉の波を、彼は我を忘れて見惚れて自分の胸を融け込まし

「しまひには、あの青葉渡る柔和な波のうねりは、わたしの眼では見られぬ世界の果ての青葉までも吹き撫でて、又囁きあつて訪れて、地球はまるい、又我が面を撫で歸つて來るだらう！

神はすべての物に宿りまします、自然の上に使徒等は翼翔けて居る！」

と、彼はぢいッと清く自分の胸のうちがしづみこまれた。

柔和と愛の何者かが、彼のうちに微笑みかけて、彼のうちの生の清きものは、再び生きかへり、芽ばえだした……。

生の清い息を吸ひ入れた。

彼はこうした自然の限りなく續いて居る一面の緑の中に、その自然の彼が生を甦らす香りの中に、涼しい風の彼が心に蘇生やす稻田の波のうねりに、すべて萬物はこの世の自然は――皆そゝりたつて起き上がつて、其の艶々しい生の兩手を、出來るだけ高く競うて神の御天を仰いで祈り差しのばし、媚び、笑ひ、讃美し、又賞めたゝへてる諸々の聲々に……。アラ！彼處で、いや何處かで、小川の、神への讃美の曲が奏でられてゐる。

――その樂の音は、低く細く、又微かに、又潺々と、時には廣く高く、この自然の世界に無限なる音諧と旋律とを響かして、その神に獻げまつる曲の音は、次第〳〵に、聞き惚れて居る彼を呑み込まして鳴り渡り、彼に囁きよつて來る――。

彼は夢中に恍惚として、一人この自然の中に佇まされて居る。彼は何んとも言ふに言はれない、たゞこの自然の大いなる懷に抱かれて居る。涼しい香りの風は起つて絶え間なく、彼が體の息は整へられ、靈は安らいで來る。

彼は自分が微笑んで居るのやら眠むつて居るのやら、それさへも知らない。

自然はたゞ生である。

自然の樂の音は又響いて來る。

——「あはれ何處かで神の自然の泉が、緣深い谷底の苔の下で、清い玉よりも清くセン〳〵ペン〳〵と流れを音立てて居る小川の、岩に激し淺瀨に淀む響きだらう」——。

と、彼は耳を欹てて、たゞぢいッと聞惚れて居る。

眠たさうに輕く怠るい瞼を細く垂れながら、咲き出るやうな輕い微笑みの蕾を、唇に笑まして——彼はシーンと、自然の味はひをたゞ味はひつゝ、又味はれつゝ、——！

彼の小さい人間の魔性を埋め葬つて、清い靈ばかりを抱いて囁いて居る、この世の自然萬象は、皆永への平和と愛の神曲を吹奏し、神を讃美して、幾萬の天軍は常に天地をゆるがすばかりの行進曲の中に、自然に宿り、又幾多の仙女はその輕い天國の舞ひを、燃えだすばかりの綠の青葉の上に踊つて居る。どんなに自然は彼に生命の息をつかせたことだらう！——光明と歡喜に溢れて居る靈氣たゞよふ自然は、淨めと平和と柔和の香りは……——。

空は雲足いと早く晴れて行く。

左手の森は神秘と神の壯嚴を包んで、ます〳〵永遠に、首を高く上げて、御空を仰いで居る。

彼はどんなにこの自然の中で幸福だつたらう！

廣い自然の一面の綠の、彼が足下の艶々と生の香りに滿ち充たされて居る青葉の、その小さき女々しき首に宿らして居る、銀鈴よりも清く明らけく冷たく、甘くちりばむ露玉を、何んといふいぢらしい可愛い涙ぐましく惠ましい思ひで、彼は見惚れたことだらう！……。

——「あー神樣はきつと、この小さき少女の草葉の一つ一つに、この露玉の一つ一つに、乾度宿つてましまする。乾度神樣は、『小さき可愛ゆき者よ！』と、祝福し、必ずその愛の御手を下して撫でまつる……！」と。

それに、その小さき青葉の露玉は、どんなに優しく

「あなたは熱苦しかつたでせう。あなたは蒸苦しかつたでせう。炎々と燃え上がる苦熱の中で、あなたはどんなに藻掻き狂つたことでせう！」

と、その小さき口もて慰め勞はり囁きながら、彼の血乾き肉衰へ燒き焦がされた、見るも痛ましき骨ばかりの體を、息をもつかずに、優しき露草の彼女は、夢中に自分の白い清い肌胸に、力任せに抱きしめて、母の懷よりも温かく、戀人の胸よりも懷しく、心から自分の胸を痛

めて泣き崩れたことだらう！……。——その小娘が流す白玉なす涙は、彼が着物を濡らし、彼が兩足に玉崩れて、身震ひするほど勿體なく、眞美至純に涼しく清く甘く——。

あー彼は、涙と崩れて萎れてる小さき露草の彼女の、そのいぢらしい風情に……、その自然の神秘の仙女の露の流れに……それに又その

「もう、この妾のいとしいあなたを、二度とあの苦熱の人間社會には歸らしめじ……」

と、口惜しく泣き叫ぶそのいとしき聲に、彼は、ごう、その清い青葉の涙の露の彼女を慰め宥めすかして、その涙を止めさせればいゝのやら……。たゞ彼は浮ぶ瀬の眼の前の涙にうろたへて、ボンヤリとぢいッと足下の青緑の彼女と、その涙の露をばかり見詰めて、ごうすることも分らない……！

泣き崩れた彼女のその風情は、ごんなに彼にいぢらしかつたことだらう！　彼の兩足は雨上がりの彼女の涙で埋もれてゐた。

我が主人公の彼は、たうとう、ごうしても自分の、その有りがたい感謝の胸の涙をこらへることは出來なく、持つて居た帽子は、何時の間にか手からは滑り落ちて、

『あ！　可愛いいとしき自然の小娘よ！』

と、跪づいた。その芝草の彼女を兩手で抱きしめて、泣きだした——感謝の焰に燃えて、柔かい彼女を、出來るだけ強かに自分の胸に抱きよせ、崇拜と尊敬の念を盡した——。

彼はそうするより外に、その優しき自然の彼女に、感謝する方法を知らなかつた。

彼は彼女が可愛いらしうて、いぢらしうて、たゞごうすることも出來なく、體を顫はし顔を押しつけて、思ふ存分泣くことによつて、自分の胸に有りとあらゆる感謝の情を、彼女が胸に傳へようとした。

あゝ彼はがごんなに、自分の清い眞心から、露草の彼女に感謝したかつたことだらう！　彼は長いこと、抱きしめた青葉の彼女の顔を、ぢいッと見入つて、感謝の嬉し涙に泣いた。

それでも彼はまだ、感謝の自分の胸の情に堪へきれないで、も一度彼女を力任せに抱きしめて接吻し、その生き〳〵しい顔を眺めて涙にうろたへた。やつと手を放して、我が主人公の彼は徐かに上體を起し、又彼女に見惚れて、離別を惜しんだ。又感謝の涙に泣いた。

アッ！　それはごんなに、殘忍きはまる人間の行ひであつたらう！　ごんなに人間は殘忍

に馴れたものであらう！

あー人間！

哀れに露草の彼女は！　人間の魔は！

彼が立ち上がつて、遠い空を恨めしく見上げて、再び彼女を見下ろした時に、彼はごんなに吃驚したことだらう！

全身がぞつとして

『惡魔ッ！』と、激しく叫んで、又ぞつとした。

彼は歎息を吐きだすことも出來なかつた。

ブル〳〵兩手を顫はして御天を仰ぎ、『神樣！』と、叫ぶことさへも出來なく、見上げた頭を酷く後垂れて、眼をつぶり、眞蒼に、絶望のドン底に陷つてしまつた。

――なんと彼は殘忍なる行ひをしたことだらう！――。

彼の體は罪惡の恐ろしさにブル〳〵慄き顫へ鳴つてゐた。たゞ神の許しを乞うた。

――彼女は死んでゐた！　その美しい心の露草の彼女が！……――。そのかよわい彼女は、

殘忍に馴れた人間の彼のために！

その艶々しかつた頰はちぎられ、そのほつそりと生き〳〵しく生え上がつてゐた胴體は搔きむしられ、頭は逆さまに地に斃れ、その根元の莖はたゞれて、見る眼も傷ましかつた。

あー！　たうとう人間の彼は――その殘忍性は――自分を慰め宥め、優しく美しく、同情の涙で泣く彼女を、彼はかへす感謝の涙で、彼女の生命を奪つたのだ！

人間！　それは、それほど殘忍性になれてゐる。

自己の生命を愛する如く、人の生命を愛することを知らない。人が自分を愛する如く、自分が愛し、愛されることを知らない。自分が人を愛せうと抱きしめる！

ために、つひ四五分前まで、神を讃美し、神に感謝し、生を歌ひ、友をさそひ、生き〳〵しく、艶々しく、雄々しく、又自由に活潑に、神の御天を仰いで、生きのびよう生きのびようと、生長の神の御惠みに滿たされ、生の元動力に促され、活氣溢れてゐた、いとしき露草の彼女を、無慘にも、慘酷にも、無茶苦茶に揉み拐り、その生命を奪うて、地に斃れさせてしまつた！

さすらひの空

彼の胸はどんなであつたらう！

彼は心から自己の誤りを謝り、歔欷の涙で啜り泣き……

『……あー神様！』

と、やつと聲を出し震へて

『あー神様！　わたしの――この人間の殘忍性は――彼女を殺しました。あの清い自然の上に美しく生え上がつて居た露草の彼女を、……そのあなたの清い小娘を……神様！　この罪深い人間のわたしは、自分の意のまゝに抱きしめて、あなたの自由なる生長の命に逆つて、彼女の生を蹂躙し、彼女を抱き殺しました。

神様！　すべて人間はあなたの閃きなくしては、何事をもなすことの出來ないものであります。あなたの御守りなくしての人間の善は、又愛は、その智慧の巧みは、すべて一人を傷つけ、一人を蹂躙し、一人を無視することに終るものでございます……

神様！　それがたとへ自己の眞心を盡したやうに見えますけれども、人間は既にその血の中に殘忍性が潜まつて居ります、自己のことばかりを考へて、人のことを考へる暇のないものであります……わたしは神様の御前で、あなたの御旨に從ひ、眞心からあの露草の小さくかよわき彼女に謝ります。……わたしは自分のことばかりを考へて、自分の胸の感謝の情を傳へようと、彼女に無理やりに自分の感情を賣りつけようと、生き〳〵しき彼女が生命の靈までも無視して買はしめようと……たうとうあの自由な彼女が晴れ〳〵しき、神を賞めたゝへまつる讃美の歌の、その小さき口までも、その命までも奪つてしまひました。

あー神様！……赤心を曝げて申し上げます……わたしは――人間は――すべてが僞善であります。わたしは自分の胸の感謝の情を、露草に賣らうと致しました、無理に相手に傳へようと致しました。わたしはそれほど愚かな者でありました。自分の眞心からの感謝の靈が、神様のあなたに通じ、あの露草の彼女の、自由なる活潑なる、又聖なる靈に通ずることを知りませんでした……すべて人間は自分の思つた通りを、人に與へよう、人におし傳へようと致します！……。

あー神様！……すべてあらゆるものの聖靈――生靈――は、あなたばかりが掌つてゐることを知りません……何事もあなたに告げることによつて、相手に自己の誠意が通ずること

の出來ることを知らないものであります。すべてあなたに依らなく、あなたなくしての一切は、僞善であり虛僞であることを知りません！……。又宇宙の淸き靈は、たゞ一つのあなたであることをも知らないものであります！　そうして、その靈が、我々萬物であることをも知りません。だから、たゞ形式によつて形式を告げ、形式を傳へ、形式を無理に買はせうと致しました……。

あー神樣！……たうとうわたしの殘忍に馴れた心の錆は、その形式によつて、彼女の生命をも、靈をも、奪つてしまひました。わたしは今、御前でその罪惡に身震ひしてゐます。誠心から謝ります……神樣！　どうかこの哀れなる者を憐み給へ……どうか神樣！　人間はすべて神なるあなたの靈の自己のうちに宿つて居ることを知らない愚か者等であります。又その靈魂は共通の一つであることをも忘れて居ります、故にすべての人間は、心の思ひをすべて形式化せうとし、靜かに祈ることを知りません。外部に發表せう——人に買はせ、人に人の生命の力と自由の活力とをまでも無視して、自己の歪められたる、あなたに離れた、あなたの守らぬ善を押しつけようと致すものであります——。

神樣！　この人間の愚か者は、それによつて社會を構成し、一人は一人を押しつけ、一人は一人を壓伏し、束縛し、善を買はせ、愛を刻みつけて、一人を抱きしめ殺さうと、息を塞がらせうとする愚か者等であります。少しも人間自身の中に、自由なる生を愛する活力のあることを知りません。又その自由、その生、そのあなたに進まうとする心は、それを得られなければ死に、又神のあなたによつて狂ひ廻り、內心の光りの叫びに苦しみ、あらゆる人間社會の、僞善の外部の如何なる拘束をも、制禦をも、繩をも、獄をも、打ち破り……藻掻き破裂し……念じ倒し、思ひ融かし、飽までもその生命の力を發揮し、岩と砂礫の隙目を潛り、或るは打ち破つて、生え上がる木の芽の如きを知らぬ者等であります……。

神樣！　愚かなる彼等はそれを知ざるがために、あなたの天國を汚がし、自然を傷つけ、殺伐を生み、自己を人に賣りつけ壓し倒して、無理に買はせうと壓迫と强制とを强ゆる哀れなる者等であります。……神樣どうか、この人間の殘忍なる、自己を人に强ふる毒素を拭ひ取らしめ給へ……』

と、涙は頰傳ひに流れる。手は固く合掌してまだ顫へて居る。

『神樣！　ごうか、あの露草の彼女を殺したわたしの殘忍性を、わたしのうちから淨めさせ給へ！……神樣ごうか、人間より利己を強ふるこの殘忍性を亡ぼし給へ！……神樣ごうか、人間より利己を人に強ひんとするこの慘忍性を亡ぼし給へ！　神樣！……神樣！……ごうかあなたの靈の心によつて、お互に生き生え上がることを知らしめ給へ！……』

と、瞼を閉ぢて祈つて居る眼からは、涙が止め度もなく頰に流れ落ちる！

眞心から何度も〳〵神に悔い、神の許しを乞ひ、小さきいとしき露草に、自己の誤りを繰返へし〳〵謝まつて、彼はなほも祈り續けてゐる。自己の殘忍性に慄いてゐる。

やうやく彼は涙と懺悔のうちに神への祈りを終へ、涙ではれた眼を落として、ぢいッと又そのいぢらしく無慘な死を遂げた――自分のために、自由なる生長の麗はしき同情の涙を流してくれ、悶へ苦しかつた自分の胸の苦熱を鎭め、涼しく冷やしてくれた――その可愛ゆき――自分の手で殺した――青葉の彼女を、も一度慘たらしく見下ろした。その今まで潑剌たる生氣みち〳〵た露草の少女は、見るも痛ましくたゞれて、廣々と青繁り續いて居る、無限なる大地の自然の上に、つひちよつと前まで、生を誇り、神を讃美し、風と囁き、友を招いた、

生命の力にみちみたされてゐた彼女は、自然の香りの中に屍となつて斃れて居る！

美しき自然より、無慘なる人間の彼のために、永遠に此の世から葬られてゐる！

側の昔を語る友の芝草は、依然と生き〳〵しく叢々しく、生命の力にあふれて、神の御天に生え上がり、何時もの讃美の歌を歌ひ續けて居る。――その側で、彼女は斃れて居る、その屍の憐れさよ！……慘たらしさよ！……、そのいとしかりしいぢらしさよ！……。

あ―人間！

あ！　彼は！　神に悔い改むる慄きと、眼の前に斃れて居る、小さき露草の彼女の、慘たらしい屍に痛む胸の感傷の涙に、ごうしても〳〵長くその場に止まることは出來なかつた。

紅蓮の焰は、彼の頭に又燃えだした。

逃げださなければならない！

狂はなければならない！

御天は白雲を運んで、蒼々と晴れやかな面を見せてゐる。

遠くでは娑婆を急ぐ人煙が、白く立ちのぼつてゐる。

悶ゆる思ひの彼は、發作的に帽子を拾ひ上げ、眼をつぶつて、苦しい頭を激しく振つた。

一目散に左手の森の中へ駈け込んだ。

ます〳〵夢中に早く走り續けた、――胸の苦しさに堪へきれなく、靈の狂はしさに何處か遠くへ逃げ失せようこ！……

下

一

蒼々こ果てしもない御天の下に、絶え間なく周る大地が球は、洋に東西はなく、大いなる西洋のうねりは、平かなる東洋に波を招き、北海の海岸打つ荒波は、南洋の岸壁に響きを立て、ラインの小娘の囁きの流れは、東亞の廢れた虎形の漢江の小波にも、春を呼び蝶を誘ひ、黄き人も、白き人も、涙そゝる人情に二つはなく、戀人を慕ひ世を怨む涙に、乙女等は皆身がしみる。

限りなき大地の續きは、山に山ならざる山はなく、谷に谷ならざる谷はなく、アルプスの峻峰もこの地の上、崑崙の高山もこの地の上、白雪戴く白頭の山も同じきこの地の上、亞細亞の憂焦がるゝ心も、西半球の戀衣も、歐羅巴の娘心も、東半球の戀しい人も、東は西に西は東に、限りもなく續くこの地はウラルの境もなく、國水は違へこ、山又山、谷又谷間を、繋がれる同

じき人情が心に、戀强ゆる燃ゆる思ひに焦がされて、探し廻る處女が心に、國はなく境はなく人種はなく、同じアダムとイブの子、——この世を厭ひ世界を果てと、限りもなく、當もなく、森から森へと野から野へと、木の葉に命を繋ぎ、露草に宿り、仰ぐ月は、冷たく佗びしく、わが身は痛く、きのふは彼方の林の中、けふは此方の霜柱の上へと——さすらひ廻る戀しき人を尋ねて、狼林山の山中をさ迷ふ獨逸娘のメリーは、今彼方の森から此方の森中に現れた。

夏も何時しか、歎息と恨みの涙の間に過ぎて、奥山の早い紅葉は、既に木枯を呼んでゐる。葉は枯れて音だてて落ちて來る。

『……でも妾、あの方は死んでゐたもの……！』

と、メリーは力なく歩みを止め、父のグランケル氏の顔を怨めしさうに見上げて、泣きだすばかりに言つた。

グランケル氏も立ち止まつた。なんとも返事も出來なく、たゞ默つて足許の枯草をばかり見詰める。

もうメリーは胸が一ぱいになつて、涙を怺へるために唇をかみしめて、ぢいッと俯向いてゐる。

日影は西山へ薄らぎ行き、秋風はザアーく〳〵と森を搖り動かして、二人の衣を吹き拂ふ。枯葉はサワ〳〵と鳴る。

夕影は寂寞に迫る。

『屹度あの方だは！……』

と、メリーは胸を泣き鳴らす。

『いや〳〵、夢は當にならない……』

と、グランケル氏は頭を振つて、宥めて進みよる。

『屹度あの方よ！……妾もう何も嫌だわ！……』

と、メリーは兩手で顔をかくし泣き叫んで、狂つたやうに駈けだす。

グランケル氏は悲痛に頷垂れて、身動きも出來なく、重苦しい溜息を吐きだす。

山陰は黑く森中を襲うて來る。

メリーは麓の方へ駈けて行く。又泣き叫ぶ、風は又サーッと吹く。

『アッ！』と、メリーは急に吃驚した。

『あれッ！』

と、眞蒼になつて、グランケル氏の方に飛んで來ながら、

『歸りませうよ〳〵！』

と、息をはづまして、急迫に叫んだ。

グランケル氏も吃驚して、ぎまぎする。

『死んだ！彼處に！』

と、メリーは息苦しく叫んで、ブル〳〵震へながら逃げだす。

指ざした方へ、グランケル氏が進み行かうとすると、メリーはキョッと縮み上がつて

『あれッお父さん！』

と、叫んで、又遠くへ逃げだす。

グランケル氏は駈けよつた。

森中に二ツの大きな土饅頭の墓が横たはつてゐる。

あたりは落葉が一ぱい狼藉してゐる。

その土饅頭の墓と墓との間に、軀殼がころがつてゐる。

グランケル氏は思はず吃驚して、一歩後に飛びのいた。

そのものは長い髪の毛を、物凄く枯葉の上に掻き亂し、顏を枯草におしつけて倒れてゐた。

グランケル氏は怖々その側に進みよつた。

そのぼろ〳〵の着物の中に包まれて居る軀は、まだ息がかゝつてゐるらしく、何かをしきりに物凄くうなされてゐる。

グランケル氏はキョッと體が固くなつて、ブル〳〵震へる手で髪の毛を掻きわけて、その顏を見入つた。

グランケル氏は『アッ！』と驚いた。

それは我が襤褸服の主人公であつた。

彼は空腹に行倒れて囈語ついてゐる——今丁度夢の中で誰かと諍してゐるところであつた。

メリーは遠くで

『おや！　お父さん歸りませうよ！』

と、泣き出すばかりになつて叫んで、又遠くへ驅け逃げて行つた。

グランケル氏は驚きのあまり、慌てて我が主人公を搖り動かした。

夢中の我が主人公の彼は、てつきりそれを敵の男から引つ攫まつたのだと思つた。

それで彼は一層酷く譫言ついた。

——夢の中で彼は

『何んだ糞！　俺を殺すのは貴樣等だ！　貴樣は俺を殺しながら、俺が自殺せうとする引つ攫まへるッ！……』

と、非常に藻掻いて、高い山の上から飛び下りようとした。

そうとも知らぬグランケル氏は、泣き出すばかりに、

『詩人の李さん！』

と叫んで、又激しく搖ぶつた。

我が主人公は又激しくうなされた——夢の中で

『貴樣は俺を社會から追ひ出して、飢殺にしてしまひながら、この惡魔めッ！……』

と、叫んで、たうとう敵の男の手を振りきつて、深い谷底へ飛び込んでしまつた。

急に彼の體は固く縮まりながら、ブルルッと慄きだした。

グランケル氏は吃驚した。

口から泡を吹きだした。齒をキュッと嚙み軋らした。

暫らくすると、そのまゝ體も慄かなく、次第に冷たくなりいつた。もう何も呻かなかつた。

グランケル氏は驚き慌てて、激しく搖つて抱へ起さうとした。

『詩人の李さん！』

と、又叫んだ。

我が主人公は『ウーン』と、深い溜息を唸りだした。急に眼をパッと開けて、突立つた。

齒をキュッと嚙みつけた。

グランケル氏を、物凄く睨みつけて、

『この惡魔めッ！』

と、いきなり怒鳴り叫んだ。

『この惡魔が又來たかッ！』

と、拳を振り上げて喰つてかゝつた。

グランケル氏は吃驚して飛びのいた。

『貴樣は俺をまた生かしたな！　俺が死なうとするのを邪魔したな！……』

と、齒を又かみしめる。

『この人間の惡魔めッ……』

と、吼え猛つた。

『どうして貴樣は先刻から俺が死なうとするのを邪魔するんだ！　貴樣等が俺を殺すんぢやないか！……人間が誰が死にたいんだ、貴樣等の惡魔の社會が苦しいから遁れようとするんだ！　俺を飢ゑ殺してしまひながら、俺を救うて、又苦しめようッて、この惡魔めッ

！　この僞善の人間めッ！……』

と、まだ惡夢から覺めない我が主人公は、又グランケル氏の方へ拳を固めて飛んで來た。

グランケル氏は、ちよつとのところで身をかはして逃げた。

又齒をかみつけた、眞赤に血狂つた眼からは火花がカッと射詰めてゐた。

『貴樣はどうして俺を救うた！　俺が谷底へ落ちて死んだのを、どうして救うた！……』

と、叫び續けた。

全身はブル〳〵慄いてゐた。

グランケル氏は固くなつて、墓の一方へ立ち止まつてゐた。

風は又颯々と枯葉を吹き鳴らす。

『貴樣は俺を救うたと思ふか？　貴樣のやつたことがいゝことだと思つてるか？　そうしなければならんと思ふのか？　善いことだと思つてるんだな、この人間の惡魔めッ！』

と、又齒をかみつける。

忌々しさうに少し語氣を緩めて、

『貴様は俺を救うたことを善だと信ずるのだらう！……』

と、又飛びかゝらうと拳を握りかためた、が、その拳をブル〳〵振はして

『それは貴様等人間ごもの、惡魔の所業を善だと說く、現在の惡魔社會での話しだ！……』

と、吼え猛つて怒鳴つた。

『どうして俺を救ひ起したのが善だ、俺を餘計に苦しめようとするのが！……畜生ッ！……貴様等は一人の人間の——澤山の人でも同じことだ——苦しむのを見て、快心に齒刃をむきだして微笑み、その血を啜らなければ生きられないのだ。俺がこの爽かな自然の香りの中に、靜かに寢ころんで仕舞はうとすると、貴様は俺を生かして僞善を誇り、俺の肉を喰はうといふのだな！……おいこの惡魔め！……どうして、俺を先刻から谷底へ飛びこませないんだ！』

と、恐ろしい勢で、又飛びついて來ようとした。

『……ウム……俺も嘗てはそう思つたのだ！　一人の人を死から救ふのは、現在社會での最大なる善だと、……しかしそれは意味のないことだ！　貴様はまだそれが罪惡である

ことを知らないのか！……つまり、一人の人をして、餘計にこの世に於ける苦痛と惱みとを嘗めさせ、藻掻かせようとするのが、それがどうして善だ！　この僞善の惡魔めッ！

俺を死から救うて、善だと喜び微笑む奴等は、惡魔が人間を、閻魔の火の地獄、針の地獄、水の地獄、穿（おさしあな）の地獄で、燒き焦し、突き刺し、引ッ裂き苦しめようとする猛惡無道な惡魔等だ！

なぜ貴様は俺を死なせないんだ！　俺が苦しんで七轉八倒するのを平氣で見遣つて快哉を叫ばうと思ひ、ます〳〵俺に苦痛を積ませようといふのかッ！

けふ死んでしまへば、明日の苦痛はなくなる。そうして又人間は、現在世界において、いつまでも生きられるものか、どうせいつかは死ぬ。同じ死ぬなら、たゞの一日の苦痛なりとも減らすことが、どんなに幸福か、貴様はそれを知らぬのか！　それを貴様等は知らぬのか？

貴様は、此の世で善とかいふ僞善の下に、俺を生き延ばして、一日なりとも長く苦しめようと！……それが惡魔でなくつてなんだ、それが惡魔の所業でなくつてなんだ！　なぜ俺を引き止めたのだ、いや貴様はどうして俺を谷底で殺さなかつたのだ！　人間を苦しめる

のがごうして善か！　善は人間を苦しめることか！　人間を苦しめるのは惡魔だ！

そんなら貴樣は……俺の呪罵こ讒謗を厭ふなら、人間は現在の世界で永遠に生きられるものであり、死は不幸であるこいふ定義を下し、俺を永遠に生き延ばさしてくれ！　それは出來ないか？……そんならなぜ貴樣は俺を救うた！……』

こ、彼の眼は急に色を失つて、ボンヤリ遠くを見詰め、眼玉を白くひつくりかへした。唾が引つかゝたやうにグッこ喉を鳴らして、苦しさうに飲み込んだ。

兩拳をキュッこ握りしめて、口を喰ひしばつた。惡感にぞつこ震へた。よろ〳〵後に倒れようこした。

グランケル氏は飛んで來て、彼を支へようこした。

『……人一人の自殺を救うてやることは、決して善ではない！……』

こ、彼は遠かに又全身をキュッこ固く突立ち止まりかへして、眼をキョーッこ尖らして叫び續けた。

その眼玉は艶を失つて物凄いほごボヤッこ凍つてゐた。

全く彼は夢遊病を起してゐたのであつた。

『一體善こか惡こかいふのは、神から見ての標準であつて、貴樣等人間社會の、國には國での善があり、人種には人種の內側での善があり、東洋には東洋での善があり、西洋には西洋での善があり、男には男の善があり、女には女の善があり、弱き者には弱き者の善があり、强き者には强き者の善がありする、そんな馬鹿げた濫山な善が何處にあるものか、それは貴樣等の勝手に拵へた僞善なのだ。善はたゞ神による一つにして、決して二つあることなく、區域、種族、自他こかの差別によつて違ふものではない。完全なる一つだ、たつた一つだ！……』

こ、彼は瞬き一つもせずに怒鳴り續ける。

『そうしてその善は我等人間の——俺が人間こいへば、貴樣等は、すぐ現在の惡魔の假面を被つた人間を想像するだらうが——。神による人間——卽ち渾一なる靈の論ずべきこころであつて、この世の中での物質を土臺こした、卽ち物質に賣られ、惡魔に捕へられた貴樣たちの世相を標準の土臺こして立論すべきものではない。だから、物質本位にいふから、

幾百幾千萬もの善があるんだ！　そんなのはすべてが人間の物質に對する、物質が人間を動かすための、物質自身の保全のための善ではあるが、人間の善ではないのだ！　つまり貴樣等は人間を土臺として神に訴へ、人間間の善惡を論じて、物質を支配することを知らず、物質の土臺として、人間を物質に使はれる從物としての――如何に物質（金錢）に使はれるべきかの――善惡を論ずるから、すべて善惡が逆になり、僞善であるのだ！　貴樣等の善といふのは、すべてが物質保全のためであり、又物質に使はれるべく、又物質が人間を動かすべく、善であつて、人間のではない。だから、すべてが物質のための策略であり、括り繩であるのだ！　人を制して自己を利せうとする――それは物質が主であり、人間が從たる場合にのみ善であるのだ！　すべて神の善惡の標準とは全然反對である、逆行する、人間の生死、生長に關係しない……。如何に物質を完全に保ち得べきやの、人間の殺傷のためであるのだ！　物質によく使はれる爲めの善惡の標準は――つまり、物質の爭奪のための善惡論は、物質に忠であつて、人間を殺すが善であるのだ！　例へば獨逸國が世界各國民を壓服し、屈しないものを切り殺して、世界統一を善とするときに、獨逸人の善は、屈

せざる他國人を矢鱈に切り殺すが善だ！　獨逸全國民はその善のために動くのだ！　又その善は獨逸國内に於て、各個人が他人を壓服せうとし、それが屈從せざる場合に殺すのが善であるのだ、そうして、茲に又矛盾があるではないか！……』

ゲランケル氏は少しも彼に反抗しなかつた。又先刻のやうに吃驚しもしなかつた。又慌てるもしなかつた。たゞ默つて頷垂れ立つてゐた。

――グ氏は、以前にも一度我が主人公が、この夢遊病を起したことを記憶してゐたから――。そうして出來るだけ、自分から聲をかけまいとつとめた――それは非常に夢遊病者の腦の組織を破壞することを知つてゐたから――。

我が主人公はどうしたことか、しきりに口を嘗めてゐたが、語調が怒鳴り聲から次第に變つて、ウニヤニヤして來た。手を機械的に振り上げては打ち下ろしながら、叫び續けた。

『……若しこの世の中が、物質本位の、物質による苦しみと爭ひと殺伐が絶對になく、惱みも悶へもなく、平穩に幸福に萬人が皆共に生を樂しんで、この世が神意の直現であり、

體現であり、人間が物質に奪はれなく、汚がされなく、一人の人が一人の人を、物質の爭奪のために壓し、括り、苦しめることがないときに、又それによる苦悶が、人間の頭から姿を消してしまつたときに、幸福なる人生から一人の人が自殺を企てた場合に、たとへ我等人間は、死は、完全なる壽命の消衰より免れることは出來ないにしろ、この世の中で一日なりとも、幸福を增させるがために善であり、又幸福に生きようとする人が、誤つて死を致したときに、それを救ふのは善であるのだ！

しかし俺は君等に一言いうておくが、なぜそんなら人間は、人の死を見たら、その死を救はうとするのか、この疑問を君等は當然抱くであらう……』

と、彼は急に語氣を緩めて、說きつけるように言ひ續けた。

グランケル氏は、どうすることも出來なく、たゞ默つてぼんやり立ちつくんでゐる。

森はシーンとして、何んの音もなく、時々松籟は鳴る。

あたりは寂しく暮れ染めて來る。遠くでメリーの聲が

『お父さん歸りませうッてば……』

と、呼んでゐる

『……我々が人の死を見ると憐れみ、急いでそれを救ひ上げようとするのは、全く我等の不注意と誤信からである。しかし我等人間の中には、その本能を持つて居る。

玆に現在人間社會に大なる矛盾がある！……』

と、彼は又急に拳を振り下ろして、全身の力限りに語尾强く叫んだ！

『その矛盾とはなんぞ！……』

と、續けた。

『それは多くの人たちは、靈と肉との不兩立だといふ。それは間違つてゐる。

靈と肉とは共に人間である。しかしこの世のこの矛盾は、我れ〳〵の誤りたる——或は知らず〳〵の考へからである。つまり、我等人間が物質を支配することを知らずして、物質に支配せられるがためである。勿論我等は、喰はなければ生きられない、しかし問題の要點は、其處ぢやない。なぜ人間は人間を土臺として、人間を本位にして、人間自身が、物質を人間の用に供しないんだにある！……』

こ、彼はいよ／＼演說調子になりいつた。

しかしその眼は常にグランケル氏を見てゐるのでもなく、遠くを見詰めて居るのでもなく、ぼやつこしてゐる。

『なぜ物質に囚はれるんだにある。つまり詳言すれば、現在の社會組織は、物質のために制度を拵へ、强盜を防ぎ、從順なる物質の奴隸たるに過ぎない。人世こはその奴隸の總體であり、人生こはその奴隸の一人の謂ひである。

故に物質の主人のために、人間は常に牛馬こなつて鬪つて、血こ肉こを曝らす、物質の命ずるがまゝに動く。故に、物質の主人公のためには、奴隸たる人間は、自分に靈も良心も有してはならない。若しそれがあつたら、物質の主人のために、又は制度のために、働くここが出來ないからである。こころが實際には、人間には靈も心もある、故に、苦しみが生まれ、人間を救はうこする本能に動く。

例を取つて言へば、昔、黑人の奴隸が絕對に主人の命ずるまゝに働らき、自己の意思をも靈の存在をも否認しなければならなかつた。たゞ道具でなければならなかつた。然るに、

實際において、彼等は靈も肉もがあつた。故に苦しみが生れた。又黑人同志を救はうこもした。

つまり今一人の人を救ふここは、この黑人の奴隸が、人間の愛こ慈悲の本能によつて、同一なる靈の痛みで、一人の水に溺れんこする黑人を救ふのこ同じである。救はれた黑人の奴隸は、又主人の鞭のために毆られて苦しみ、火の海、針の山、刄の尖にも飛び込まなければならない。

それである。

俺を救うたここは、この世が完全なる人間共樂の社會であつた場合に、人間的世の中であつた場合に、人間の本能の現れたる救ひは善であり、救はぬは不善である。しかしこの苦痛の世の中においては、あの黑人がちよつこ考へるこきには、一人の死に瀕した黑人を、その自分等の苦痛より遁れさせんがために、救はないに違ひない。人間の本能を殺してまでも……。しかしてこの世の中で、一人の死を救ふここは、元來は善であるべきも、この現在社會が惡なるが故に、——つまり、物質のために、生きんがために生れたる人間の靈肉

の生命を死くす――その惡を、救はれたる人間に强ひんとするが故に惡である。

苦し我等がこの本能を滿足せしめんが爲めには、奴隷が開放され、完全なる一個の人格者に歸らなければならぬと同じやうに、我等が先づこの物質社會から完全なる人間に歸らなければならない。

その人間が、人間のための善の社會を形成しなければ、すべての善惡、すべての人間日々の行動は惡であり、惡より救はれない。

卽ち善は、神――靈及び靈の具體化せる肉――のための善であり、人間は人間の靈肉を生かすために善であるときは、現社會は惡である。若し又物質のための現社會の如く、殺傷の人間の死滅を善とするときは、――卽ち社會組織――あらゆる制度、掟、戰爭、名譽、富其の他道德、宗敎、文明、眞理等、如何に人間を完全に物質に使役させ、又その人間の良心をも、人間を物質の奴隷たらしめんがために、僞罔させ、鈍らせ、調和せしむべきやの、總べての物質の奴隷根性が善なるときは――一切の人間の良心の現れは惡である。しかして人間は、この善惡の目標の一方に偏し、一方にのみ進むにあらざれば、苦痛と矛盾より自己を救ふ

ことは出來ない。しかして、人間が現社會の如く、死を競ひ、死の暴虐を演じて、なほ人間の心の痛まざるときには、現社會の死滅の結論を善といふべきであり、人間を救ふことは惡であらねばならぬ！　人間を殺すが善だ！　人を殺して、物質を助けるが善だ！……けれども現社會の殺傷を厭ひ戰くは、人間の心である。故に人間は死滅を目標とすることは出來なく、草木の如く生え上がるが善である。故に我等は皆再び生れたる赤兒の靈肉一致に歸り、物質のための死の惡より遁れ、その惡をさけて、神の御旨の自己に歸らなければならない。然らざれば、善惡の理論はすべて逆である……』

と、急に我が主人公はごうしたことか、眼をまごろ〳〵にし、手足をだらッとさせて、

『それだから人生はごうせ苦の種だ。救うてはいけない。救ふのは罪だ。しかし若し完全な靈肉な人間界であつたら、人間を救ふのは善だといふが、なんだか其處に……』

と、自分の言つたことに他の人が問ひかけるやうに言つて、

『……そうです……』

と、又力つきバッチリと眼を開けて

『それは、人間を本位にして、人間を苦しめるのは罪惡だといふことになります。だから、人間を救はんとする者は、つまり我等の元來の本能を滿足せしむべく、先づ我等は現在社會の物質から、人間に歸らなければならんのです……』

と、又不思議なことには、彼は自分で言つたことに答へるやうに自分でいつた。

その時の彼の眼は、或る何かの幻を見てゐるらしく、空に浮いてゐた。

『そんなら、あなたは革命を起せといふのですか？』

と、今度は激しきつた語調で、詰問した。

確かに彼は今、話者と對話者との二重人格を現してゐる。その度毎に眼の色が違ふ。

グランケル氏は「若しか精神に異狀でも起しはしまいか」と心配して、おど〳〵彼の顏を見上げる。

彼の視線はボヤッと――グランケル氏を見詰めて居るらしいが――グランケル氏の顏を越して、向ふの方に外れてゐる。

『革命？』

と、彼は驚いて反問するやうな、反駁するやうな調子で、にえきらなく呟いた。

『そうです』

と、彼は今度は質問者の態度にかはつて、舌をベロリッとさせながら言つた。

對話者を睨みつけるやうに、眼を尖らした。

その眼は見るに見られぬ一種の凄味を帶びて居る。しかしやはり夢見る人のやうに色を失つて居た。

ところが、又急に

『革命は罪惡です！』

と、恐ろしく大きい顫ひ聲で答へ叫んだ。

グランケル氏に物凄い視線を注いだ。

『革命が罪惡？』

と、又聞いて呟いたが、

『そうです、罪惡です！』

と、きつぱり答へて、急いで言ひ續けた。

『革命が罪惡でなく、人を殺すことが罪惡でなくつてどうするんだ、そんなら何が罪惡だ！』

と、噛みつくやうに叫んだ。

が、又急に

『けれども革命なしに、あなたの言つた人間本位の世界に、我等は歸られ得るのですか？』

と、ブツ〳〵不服さうに呟いた。

グランケル氏はどうしたことだらうかと、たゞ我が主人公の顏をばかり見守り、驚き呆れて、その成行きを待つばかりであつた。

二人の體は共に戰いてゐた。

『革命はそれ自體が既に罪惡です！』

と、　又答へ言つて、どうしたことか口を噤んで、あたりを見廻はした。

メリーの聲が、彼方の森中で

『お父さん歸りませうよ！』

と、泣き出すばかりになつて、叫んでゐた。

我が主人公は、その聲を見探すやうに、又あたりを見廻しながら、初めて瞬きをした。

が、どうしたことか、又

『出來ますとも、出來ますとも、革命があつてどうするのですか……』

と、言つて、蠟のやうに蒼白い顏を振り動かして、一生懸命に空を向いて何かを見探した。

『革命は革命で終ります。人間の殺生の上に、物質の地位換への爭奪戰を行ふのが革命です。人類社會での幾多の革命の歷史が、それを證明して居ります。

その物質の地位換へのために、中で爭鬪によつて死ぬのは人間です。いやその地位換へも、地球上の物質を火星界へも、又山の物を水の中へも持つて行かれないのです、たゞ爭ひ、殺しあひたいから殺しあふのです。

そんな革命の罪惡を行つてどうするのです。革命とは畢竟何を意味するのですか、物質のための社會制度の變革を意味するので……』

と、言つて、頸をちよつと捻り、何かを思ひ出さうとするかのやうであつたが、又頸を持ちなほして

『いや、切言せば、物質の位置換へを、一つの手から一つの手に移することが革命です、改革です、改造です。要するに物質の社會制度を、物質のために、その制度を改革するのが革命であります……』と、瞼を閉ぢて眠るやうにして、又答へて説き續ける。

『つまり甲の人が物質の殿樣に主仕へをして居つたのを、乙の人も共に主仕へをせうとか、或は甲を殺してしまつて、乙自分ばかりが、その物質たる殿樣に主仕へをせうとすることであります。それが改革です、革命です……。そう……その主換への、物質に仕へ換へをするのが、ルイ十四世を殺した佛蘭西革命です、世界の戰爭です、又社會改造の理論です。決して物質より人間に歸らうとすることか、又は、人間本位に物質を取扱はうとすることではないのであります。或時には、人間が物質を取扱ふやうに見えます、しかしそれは單に人間の良心にそう映つただけで、又人間たちは、すべての改革の場合に、常に人間の良心に訴へようとします。それはかういふ風に、——卽ち甲の者が主仕へをして居た物質の

殿樣に、他の乙もが、共に主仕へをせうとか、或は甲を殺してしまつて、乙自分一人ばかりが主仕へをせうと、惡辣なる奸計もて甲を惡だと叫び、自分のことを絶對に眞理だと人々に思はせるがために、奸惡にも人間の良心を假りて、善だと思はせ信ぜしめようとする。……しかし要するに、その爭ひは主仕への爭ひたるに過ぎない、主從の關係を轉倒することは出來ない。

決して〳〵人間が、物質を踏んで立ち、物質に主仕へすることを止めることにはならないのであります。

だから物質に仕へる奴隷どもは、物質のために、互に殺しあひ互に鬪ひあつて、人間はその中で死んでしまふ。

しかしそれでも人間社會は、喰ひあひしなければならんのだ。何處までも改革を叫び、革命を呼ばはり、又或はその物質に對する主仕へを等分に——つまり共產主義者のいふ如く唱へなければならんのだ。しかしたとへ產を共にするとも、物質に使はれる者は、主人に等分に使はれたからとて殺傷を止めることは出來ない。

やはり物質の主人の命ずるまゝに、人間は殺しあはなければならない。又他の社會主義者のいふ如く、或る特種な一階級の人にのみ物質を守らして見たところで、矢張同じである。わたしは斷然叫ぶ、物質を踏んで立て！　物質の改造又は物質制度の改廢のために、人間の殺傷を行ふことは出來ない、人間が生きなければならない。人間が物を使はなければならないといふのであります、つまり物質に人間の生命を任かすな、人間の生命のために物質を使へと、現社會制度の根柢、その根本成立の理を覆させなければならない。物質のための社會制度より、人間のための良心の社會化を體現しろといふのであります。それは丁度草木が生きがるために、生え上がるやうに……故に今迄の幾千萬年來の人間たちが、又我等がたゞへ、今後幾ら物質的改革を行つて見た所で、つまり物の所有換へをして見た所で、物質より人間は遁れることは出來なく、又現社會制度が、人間各自の良心に近づくことも、人生が爭鬪にあらざることもなく、世界より戰爭を絶滅せしめることも出來ない。根本的の誤りたる物質のためといふ考へを、人間が人間のためと考へなければ……物質は物質で、人間ではないからです……。』

と、彼は丁度敎壇で懇篤に講義でもする調子で言つて居つた。

が、急に眼玉をボヤッと白じろくさせて、寢ぼけた人のやうに、グランケル氏の顏に視線を持つて來た。しかし、グ氏を見詰めて居るのやら、ごうしたのやら、ヌーッとまるくなつて、

『いや〳〵……』

と、呟きながら頭を振つたが、又

『勿論です、人間は喰はずには生きられないから、喰へといふのであります。物質に喰はれて死ぬなといふのであります』

と、視線を遠くの方へ外らして、森の方を見探した。

周圍の森は寂しく冷たく立つてゐる。

灌木の枯葉の音は、森間を通して吹き來る夕風に、サワ〳〵と鳴る。

『それはちよつと話が違ひます』

と、自分の足許を見廻はす。

水でも欲しさうに、口を昔める。

『なぜつて、誰も皆が喰ひ得るだけの物があれや、誰も物や金錢のために殺生はしないだらうから……』

と、質問したが、又顔を擡げて、彼方の森を見詰める。

手足は絶えず戰いてゐる。

グランケル氏は一歩彼に進みよつた。「李さん」と呼ばうと、彼の樣子を窺つた。

『そんならあなたは、足らぬ物を爭奪すれば、皆が滿足に喰ふことが出來ますか？　又時には、いや常には、一方には餘り、一方には飢ゑ死にするといふことは？』

と、呟いて、グランケル氏をヌーッと睨みつけた。

『李さん！』

と、グランケル氏は叫んで、體に手を觸れようとした。

彼は眼玉も動かさなく、

『それだから、有るところから無いところへと、分配が行はれるために生存競爭があるつて、……』

と、又ちよつと默つたが、

『ところで君は！……』

と、いきなり叫んで、グランケル氏を睨みつけた。

噛みつくやうに、がみ〳〵叫び續けた。

『君はその競爭、その分配が、爭奪にあらず、又人間の殺傷に始まり、人間の殺傷に終ることを知らないか。又君は分配すると言つた。足らぬものなら、どうせ皆んなが滿足することは出來ないといつた。なぜだ。……人間本位の場合には、誰がなぜ物質を一方に澤山蓄積して、盜賊を心配する者が居るんだ！　皆人間のために喰ふんだ！　盜賊が何處に何しに居るんだ。なぜ人間は喧嘩するんだ。體に傷を受けることが、人間のためにならざることを誰が知らないんだ！　分配の闘爭もなく、競爭もなく、又足らざる時には人間のために生產することを知つてる。

今茲に一つの例を取つて話すと——實際は、人間は物質の奴隷であるけれども、今は僅にその爭奪の例を言へば、此處に一皿のパンがあるとする、そうしてそのパンが一人分しかな

いとして、この世界に人間が十人居ると想像する。

君の言つた所によると、一人分のパンは十人の人が、皆滿足に腹一ぱいには喰ふことが出來ない。だから先づ喧嘩をして奪ひあはなければならないといふ。又奪ひあつても、一人分のパンを一人の人が皆喰へや滿足が出來るが、勝つた者二三人して、喰はねばならぬようになれや、どうせ滿足は出來ないが、それでもパンのために、忠實に爭鬪を續けなければならぬといふ。又殘る二三人の者もが殺しあつて、結局は皆共斃れして死んでしまふ。するとパンのために人間は皆な死んでしまふ。なぜその人間等は——我等は人間である。パンのために生きるのぢやない。生きるがためにパンを喰ふんだ——と、體の傷を互に痛み、爭へば傷がつく、人間のためにならないと、かう良心ある完全なる人間に歸り、人間がパンを喰うて生き、決してパンのために互に殺しあひして、結局は皆な人間が死んでしまふためではないことを、なぜ氣つかないんだ！

若しそれ等十人の人が、この自覺があつたら、我等人間は完全にして渾一なる靈の所有者である。故に、我等は互に生きなければならない。生きるがためには、靈肉の痛みと、苦

しみを避け、眼の前の一切のパンを、如何に自分等が喰ふべきかを、すぐ考へつくに違ひない。そうして足らぬと思つたときには、又人間のために生産することを知る。若しそれを知らぬ者があるときは、學問はその良心を啓蒙するために必要であり、又その人間の用に供すべき物質を、生産するために必要である。しかして進歩は人間の幸福を增すがためにのみ存する。

故に不幸なる現社會での人間萬事は、殺傷や鬪爭の罪惡的自滅行爲を行はなくとも、我等が一度「我等は同じき共通一の靈を有する人間である」といふ自覺一つで、すべては無難に解決し、生の本來に歸り、生長し行き得るのである。

何がために血腥き殺傷を敢てせうといふのだ！』

と、彼の口は器械的に動き、意識を持たない話聲は、不思議に次第に熱をのぼしていつた。が、少しも體の態度がそれにそぐはなかつた。

『しかして、我等が現社會において——この物質のための社會において——人間のための人間に歸り得るがためには？……そは最も簡單なる問ひにして、靜けく我等が、殺傷を忌

さすらひの空

み嫌ふ自己の良心に問ひ、その聲を聞き、神の聲を聞き、各自が良心の靈火を大きく盛んに燃やすことによつて、我等全人類は完全なる靈と肉とを有する人間に歸り、この社會は平和境に歸ることが出來るのである。

何が故に苦しんで革命を起し、人を殺し、物質に支配され、自己に眼さめず、人間の內より靈を消え失させ、又はその存在を否認してまでも、苦しまうとするであらうか！

すべて我等がこの世において、如何なる名目の下に行つても、——それが名譽、地位、富、愛……眞理、幸福、自由、その他あらゆる如何なる名義の下に行はれても、その殺伐、その闘爭は皆罪惡にして、現社會での人間萬事は皆人間のためならざる、物質に囚れたる魔の蔓りにして、つまり、現社會の制度、成立、組織、其の他すべてのことが皆物質のためにして、眞の人間のためにあらざるが故に、この現社會のために盡すことは、すべてが物質のためにして、人間のためには惡である。元來根本土臺たる現社會の組成が惡なるが故に、そのために盡すあらゆる……たとへそれが、人間のための如く信ずるも、そは皆惡である。

卽ち玆に現社會といふ一本の惡の樹が存するときに、我等人間が樹に肥料をやるは善なる

行ひなるも、その惡の樹を大きくならし、その樹の生長を助けるがためになしたる、肥料をやることいふ行ひも亦、惡でなければならない。つまり强盜が惡なるときは、その强盜を助けた、手下の眞心を盡した行ひも亦、惡であらねばならぬと同じである。故に現社會に盡すことは皆惡なるのみならず、あらゆる眞理といふも知慧といふも、皆この惡の樹を助けるものたるに過ぎない。眞に現在社會において、我等人間の智慧、智識、眞理なるものは、何がために必要であり、あらねばならぬかといへば、そは人間の殺傷や苦悶を增し、競爭を激烈ならしめるがためにあらず、たゞ我等がこの社會より人間に歸るがために眞理であり、必要である。

現代の人間が務むべき、この一事——人間に歸るがために進むべきこの事を外にした、すべての理論も實際も、そは皆人間の本心にもごれざる、又ためならざる、物質に奪はれたる誤れる考へに基くものである。物質の奴隸たる地位を離れざる考へからである。

我等は人間に歸れ、人間が物質の主になれ！　自己の良心に聽いて、その聲によつて物を

喰へ！　其の聲を聽け！……然らざれば

今に、革命の鬼、生存競爭の魔は、世界を、血の海と化し、屍の山を築くであらう！』

と、彼は握り拳を振り下ろして叫んだ

ツーッと立ち止まつたまゝ、身動きも出來なかつたが、二三歩蹌めき歩みだした。

グランケル氏は彼の腕を攫んで

『詩人の李さん……』

と、呼ばうとすると、彼は急に眼の玉を白黑させて、遠くに視線を据ゑ、

『人間はこの世の中で、自殺する者は一人もゐない！』

と、激しく叫んで、口を喰ひしばつた。

グランケル氏を酷く睨みつけるらしかつたが、その凍つた瞳は外へそれてゐた。

『それはこういふ譯だ……』

と、又言ひ放つた。

『……たとへ、その外形上の死害行爲等が自殺者自身にあるとしても、それは決して死者自らが、自己を殺したといふことにはならない……』

と、眼をパチクリさせ、手先を酷く顫はした——丁度惡寒にふるへるやうに——。

遠くの人に話し聞かせるやうな演說調子で續けた。

『……人間社會が——すべての人間が——彼れ自殺者自身の手を借りて殺したのである。

誰も——人間社會も人類も——死者に苦痛を與へなく、物質に使はれず、爭奪がなく、人間の用に、有るだけの物を皆用ふるときに、又人間のために生產するときに、物質の奴隸がその自分苦痛が生れなかつたときに、幸福ばかりが此の世にあつたときに、苦痛が生れ、

の主人のために、利を殖やし、城門を堅固に守らなかつたときに、何人も死者に幸福と歡喜と共存の愛に燃え、樂を共にせうとするときに、又死者をして、物質の暴君のために進退茲に谷まらすことなく、彼の前後左右上下を擴げておき、生れたてのまゝ、彼を自然のまゝに、自由なる世界に、廣々たる天地に立たしたときに、誰が自己の幸福をすてゝまで、自殺といふ叛逆行爲を敢てし、罪惡を犯すを以て快とする者があらうぞ

今茲に一人の人が、刀を自己の首へ突き立てるを見よ！……』

と、我が主人公は言ひ續けた。

グランケル氏の手を冷酷に振りきつた。

『……その生に戻るの恐怖に慄き、死の刹那の苦痛を叫んで狂ひ、自己を惜しんで斃れる！

その憐れなる彼が手には、無形の無數の死の强制者——社會、人間——の種々樣々なる、

惡辣きはまる脅迫に壓し迫られて、天を仰いで喚き、地に向いて歎き、空に叫ぶ。何んぞ

その悲慘きはまる可憐なる有樣よ！　生に戻る者の、如何にその苦しきを知らぬか！

それを、その苦痛を、君等强制者——君等が社會と、君等の手によつて——等の强制によ

つて、止むに止まれず行はれるのだ！

その手に持つ自殺の刀の刃には、幾億萬年の恨みと、千秋の涙痕とをたゝへて居ることが、

君等には知れぬのか！

君等はその一人の人に對する强制者として、又殺害者としての全責任を負はなければなら

ぬのだ！　決してそれを免れることは出來ない！　物質の奴隷たち、血を飲む君等は、生存

競爭てふ常從の戰鬪によつて、日に何千の人を君等自身の手で、或は殺し或は傷つけ、又

金錢の彈丸もて、幾多の自殺を强制するのだ。又直接に制度なるものによつて、その死を

おしつける。それを決して否むことは出來ない。それを否まうとする君等の根性こそは、

如何に惡魔以上にして、又奸智に長けたるか、又陰險きはまる魔の手を弄せうとするのか、

如何に汝等は殘忍に慣れて平然たるか！　汝等の頭は天に向けども、汝等の惡しき行ひは、

神に叛くを知らざるか！　汝等の手によつて行はれたる、幾萬ともない罪惡の數々を思ひ

出でざるか！　これ惡魔よ退がれ！　汝等魔物よ！　如何に汝等は！……』

と、眼を猛り瞋らして、口を喰ひしばつて、グランケル氏を睨みつける。

しかしその眼は、グ氏の帽子の上にそれて、凍つてゐた。

それでなほ、彼は熱してゐるらしかつた。

全身が怒りでブル〳〵顫へた。

またもグ氏を夢中の敵の男と感違ひし、又喰つてかゝらうと藻掻いた。

あたりの森は、死んだやうに、なんの音もなく。

メリーはどうしたのか、呼聲もない。

グランケル氏は、どうする術もなく、たゞ彼の眼の動き方を注視してためらつてゐる。

『……眞の意味に於て……』

と、我が主人公は深い溜息を吐きだした。

聲を勵まして、又叫び續けた。

しかしその聲色は、泣き寢入りする猫のそれに似てゐた。

『……眞の意味において、死者に對する責任を、人間社會が負はず、免れ得る死が、この世の中に一つでもあるとしたら、それは——或は、現に、多くの死者に對する直接加害者、又は强制者の地位にありし者が死んだとしても——その死が、我々人間社會で責めを負ふべきものでないとする、死があるとすれば、それは睡眠中の一人の自害行爲でなく、又生れぬ先きの胎兒の死でなく、この人間社會以外の、しかして又亡靈ならざる、草木禽獸魚介にして、人間社會と全然關係なき、或ものの死でなければならない。一人の人の死には、我等人間社會は勿論、何人もその責任を負はなければならない。それが文明が進み交通が頻繁になればなるにつれ、北極の人の死は、南極の人もその責に任じなければならない！……若しこの責任から……』

と、力强く云つて、口を喰ひしばつた。

今にグランケル氏に飛びかゝりさうであつた。が、ドッと力を失つた猛獸のやうに、グンニャリして、

『所謂現代文明は、物質の文明にして、精神の存在を認めず、物質のための文明の罪惡さは、人間の靈肉を器械化し、物質の奴隷たるに最も適應ならしめようとして居る……故に現社會での人生觀は、すべて物質の奴隷觀である』

と、つけ加へて、

『……現在の物質のための社會で、若し一人の人の自殺の責任から……』

と、話を前に戻した。

『その責任から我等が遁れようとするときには、先づ現在での一つは、死して、以後の全然無關係なる人々の自害行爲に、責めを負はないか、或は現在人間社會でのあらゆる望みと物慾とを棄てゝ、社會から遁れ離れて、喰はず飲まず、或は露や木の芽を喰うて生きるここである。

他の一つの完全なる法は、我等が皆物質の主に歸り、自己の物質に囚はれたる錆れた心を、清め悔い改め、人間共樂の社會において、人間各人がその天命を全うすることである……』

と、優しく言ひきつて、急に

『……一人の死に對して、石ころのころがりたる如く……』

と、憤憤にかられて、遽かに脚までも、ブル〳〵震はした。

『その屍を踏み越え、踏みにじつて前進することは、人間たちは勇敢なることとして歡迎し、譽れ高きことする。果してその獸惡行爲が人間の詭辯と奸智によつて拵へた善といふ名目での、僞善なる罪惡的名稱によつて、永遠に人間の靈を亡ぼし、良心の光りを失させ、良心の光りによる苛責の念を起させなく、戰線に於ける兵士たちが、戰爭行爲を罪惡なりと認めず、殺伐の爭鬪に倦まなく、果して强盜が殺人の惡行に顚へないか？　全人類は一人の自殺者に對して、その全責任を負はないといふことが出來るか？　殺人犯人が自己の加害行爲に對して、何等の責めをも帶びずに、自己の靈と良心の存在を否定

し、人間には斯る靈を持たずと頑張ることが出來るか、この人間社會には、眼前の物質の爭奪戰があつて、人間の神を追求する靈と良心は、現實には何んの係はりもなしと、獸肉ばかりを爭ひ得るか！……そうであると斷言し、靈なき人間ばかりが居ると言ひ得るだらうか！……』

と、彼は平調で言ひ終つて、急に又兩手をブル〳〵と物凄く震はした。

口を噛みしばり、握り拳を振り上げて、眼をまるく尖らしてグランケル氏を睨みつけた。

『これが惡魔の貴樣等だッ！』

と、カッと叫んで、急に又何かに刼えたやうに、手を引き、眼をほやつと遠くへ据ゑて、危く足を一歩後へ踉き退めつた。

今まで何んとも手のつけやうがなく、身動きもせずに、我が主人公の樣子をばかり見守つて居たグランケル氏は、驚きよつて、彼を支へ扶けようとした。けれども、そのまゝ彼は墓と墓のあひ間にドッと倒れた。

眼は力を失つて、『ウーン』と唸つた。

顏を又枯草におしつけた。

口から泡を吹きだして呻いた。

グランケル氏は驚き慌てて

『詩人の李さん！』

と、激しく叫びながら、彼を酷く搖り動かした。何んとかして、息を吹返へさうと藻掻き焦つた。けれども、それはなんの効もなかつた。

日は既に黃昏暮れて、周圍の森中は暗かつた、

戰く松籟の音は、枯葉をカサ〳〵と闇を急がしてゐた。

グランケル氏は又彼の肩先に手において

『李さん〳〵！』

と、體を搖ぶつたけれども、色失せた眼をも閉ぢてしまつた。

搔き亂されて垂れ下がつてゐる髮の毛は、グ氏が彼を搖ぶる毎に、死人のやうに物凄く、頭と別々に搖られてゐた。

メリーの怖震へて居る聲が又

『お父さん〳〵！』

と、遠くの森中で呼んでゐた。

間もなく我が主人公は、『ウーム』と唸つた。手足を伸ばして長い欠を吐いて氣伸びした。

「ウーム」と、苦しく體を捻つて眼を開いた。

グランケル氏は手を措いて、彼の顏を見守つた。

我が主人公は、今深い眠りから眼さめて、不審さうにグランケル氏を見詰め上げた。

不思議さうに、寢ぼけた辛い瞬きをして、又グランケル氏の顏を見詰めた。

彼は今眼さめたばかりで、何んにも分らないらしく、又瞬きをして、まだ眼さめない自己の記憶を、喚び起さうとするらしかつた。

グランケル氏は

『詩人の李さん！』

と、彼が息かへしたのに狂喜のあまり、聲も出なく、やつと苦しく叫んで、又彼の肩を搖り

動かした。

彼はまだごうしても、自己の記憶に歸ることが出來ないらしく、グランケル氏の顏を見詰めるのも止めて、物うささうに口を甞めて、又眼を閉ぢた。

そのまゝ寢てしまはうと頭を搔いて、寒氣に體を縮めた。頸をつくめて、兩手を股の中に差込んだ。非常に疲れきつた寢息を吐きだした。

グランケル氏は又急いで彼の名を呼んで、肩を搖つた。

彼は辛い顏をした、嫌な眼を少し開いてグランケル氏の顏を見た。

グランケル氏は又彼の名を呼んで、眼さめさせようとした。

けれども、彼は辛さうに、又眼を閉ぢて、窮屈に體を捻つた。

『李さん〳〵！』

と、グランケル氏は續けさまに、彼の肩を激しく搖り動かした。

彼は又口を甞めた、體中が痛むらしく、辛く顏を顰めた。口を噛みしばり、怠るい寢息を鼻から吐きだした。

ウーンと又體を捻りのばして、急に起き上がつた。

滿い瞬きをしながら、あたりを見廻した。

非常な精神の疲勞のために、體が微に震ひ鳴つてゐた。

脚もよろ〳〵してゐた。

眼を睜つてグランケル氏を見詰めなほした。それでも記憶に戻れないらしく、肩を寒氣につくめて、頭を搔き、窮屈に體を捻つて、又坐りなほらうとした。が、も一度辛く瞬きして、頸を長く突出してグ氏を見詰めた。

眼は少しく冴えて來た。

長い欠を、も一つした。

又瞬きしなほして、自分の記憶に歸らうとグ氏を見た。

急に顏を俯向き垂れた。『ウーン』と深い溜息を吐きだした。

『詩人の李さん！』

と、グランケル氏は又叫んだ。

彼はドッと頭を頷垂れて、眼をつぶつてしまつた。

グランケル氏は狂氣のやうに、彼に飛びついた。

『お父さん歸りませうよ！』

と、顚へを帶びたメリーの呼び聲を、彼は初めて明らかに聞いた。

『詩人の李さん！』

と、グランケル氏は又叫んで、彼の兩手に縋り、固く握つて、自分の唇におしつけて泣き崩れた。

彼は胸が塞がり喉がつまつて、苦しい溜息も吐き出されなかつた。

『李さん〳〵！　あなたに遇ひました！』

と、その震へ泣くグ氏の聲は、あまりに殘酷に哀れであつた。

夕日は暮れて、黃昏は薄闇と變り迫り、黑い森は沈みかへつて、ガサ〳〵と枯葉の音は鳴る。

グランケル氏の跪づいて泣き崩れて居る體は、非常に沈痛に震へてゐた。

我が主人公の垂れ下がつた顏は、ます〳〵沈み垂れていつた。

奧山の宵迫る森中は、鳥の音もなく、ます〳〵闇に包まれて行く。

グランケル氏はやつと顏を咽び上げて

『詩人の李さん！　あなたにお目にかゝりました！』

と、眼をぼうッと、夢見る人のやうに彼を見上げて、涙ながらに言つた。

グランケル氏はやうようのこと、起き上がつた。

『あなたは非常に變つて居られます！……李さん！　僕……僕を御存じでないのですか？』

と、グ氏は慘らしく、彼に哀願するやうに聞いて、握つて居る手を又固く握りしめた。

『僕はグランケルです！』

と、せつなく告げて俯向いた。

力なく彼は重苦しい顏を上げて、グ氏を見た。

——グランケル氏は非常に年寄つてゐた。黑かつた髮は白髮に變り、額には深い苦勞の皺を

刻んで、昔晴れ〴〵しかつた面影は消え失せて、非常に憂鬱に襲はれてゐる顔は、涙ぐましく彼に何かを哀訴してゐた——昔、陽氣で膨揚なグ氏を見た眼で、今のグ氏のこの變化に、人生の悲哀と凋落に——又彼は顔を沈み垂れた。

——物言ふには、あまり彼の胸は、苦しく一ぱい塞まつて、痛く悲慘であつた——。

森もシーンとして何んの音もなく、二人はともに苦しく沈みかへつてゐた。

夕闇はあたりを襲ひ初めて來る。

『詩人の李さん！　僕等はたうとうあなたに遇ひました』

と、又頭を落とした。

『お父さん！』

と、メリーが近くの森中で呼ぶ。

グランケル氏は、メリーの聲に吃驚したやうに

『メリーや！　メリーや！　メリー……詩人の李さんだ！』

と、叫んだ。

『李さん？』

と、驚いたメリーは、狂氣に叫んだ。

飛んで來た。

彼女はギヨッと墓の側に立ち止まつた。

固くなつて彼に進みよれなかつた。

意識も感情もかたまり慄いた。

眼ばかり鋭く尖つて、彼を見据ゑた。

やつと兩手で強く自分の胸をおさへた。息塞まつて苦しく全身が慄きだした。

彼の視線はそのメリーの方に動いた。

二人の視線は、ギヨッと衝突した。

彼は吃驚して、すぐ視線をそらして頷垂れた。

前の墓をぢいッと見詰めた。

メリーは氣絶して倒れさうになつて、左の墓の方に一歩踉めき退つた、が、やつと體を持ち

なほして

『あなた！……』

と、轟く胸で喘ぎ叫んで、彼に夢中に飛びついた。

彼の頸を固く抱きしめた。

『妾！　妾！　妾はもうあなたには……！』

と、メリーは言葉も續かなく、父の前をも憚らずに、夢中に自分の顔を彼の頰におしつけて泣き崩れた。

暗がりの森中は、身の毛もよ立つほど、寂しくなんの音もなく、時々枯葉の音があたりを破つて鳴る。

兩側の十饅頭の墓は、あたり凄淋しく、地下に男女の白骨を横たへてゐる。

グランケル氏は、右の墓の側に俯向き立つてゐる。

黑い闇の幕は、森深い周圍を襲うて、皆の上にその手を擴げ下ろして來る。

闇風が、薄寒く吹き過ぐ。

暫くしてやつと我が主人公は、ほんやりした夢心地から、ハッと氣がついて、全身をドキッと驚かした。——その神々しく香り高い處女のメリーを、彼は力任せにグッと自分の胸に抱きしめてゐた。

メリーの白い肌胸の心臟の鼓動の一つ〳〵は、彼の胸に、温かい處女を動悸打ち刻み、轟かし、慄く乙女の靈の、崇嚴な神靈を抱く恐怖に、彼は全身をブル〳〵震はせた。

戀寢れたメリーは、息も微かに、白い女性の靈も身も、戀焦がれし人の腕にまかれて、異性の抱擁の幸福に醉ひ崩れんと、恐ろしく熱しきつた彼女の唇は、戀人の彼の頰に甘鋭いキッスを固く刻んでゐた。

彼はギョッと又吃驚した。女性の香りは、彼の全身の肌をついた。

背中に冷汗がサッと通つた。

青春に燃えて彈力に富んだ眞白いメリーの頸筋が、パッと眼に光つた。化粧の香りが鼻をついた。

メリーはもう小娘ではなかつた。一人の異性を求めてゐた。確に香り高い處女であつた——

昔の靈ばかりの彼女も、今は肉を呼んでゐた——。

彼の眼は遠くを見詰めて、鋭く凍り慄き、全身は物凄く顫へ出した。

『アー俺は？』と、彼の全身は恐怖に強ばり、メリーを抱きしめた兩手は力を失つて、ダラッと、解き下ろされた。

『あー俺はどうした！』と、恐怖に凍つた溜息を吐きだした。眼はます〳〵ぼやッと遠くへ据ゑられ、口はぽかんと、頭は仰向き垂れた。

それでもメリーは、彼の胸から離れようとはしなかつた。ます〳〵彼の頸に自分の頸をおしつけて、固く抱きしめよつた。

その柔かい處女の肌は、氷のやうに冷たく強ばつた彼が胸に、「あなた」「あなた」と呼んで、甘く媚びりついてゐた。

彼の閉ぢた眼は、更に遠くを睨み開いて、恐怖にこはばつた兩手をやつと顫はして、メリーを胸からおし放した。一歩後に退つて、急に又ドッと頭を酷く頷垂れた。

眼を絶望につぶつて、慄く重苦しい溜息を、ウーンと吐きだした。

髪の毛と兩手は、だらッと垂れ落ちされてゐた。

メリーは『アッ！』と悲歎に、彼の足許に泣き崩れた。

枯葉鳴る音が聞ゆ。

暗い森の中は、隅々までも沈みかへつて居る。

遙か向ふの山の頂照らす、仄かな宵影も薄らいで、遠ざかり消え失せた。

闇染めた森の上を、迷ふた二羽の小鳥が、轉り慌ててわたり行く。

『李さん！　李さん！　あなた李さん！……』

と、メリーは泣き叫ぶ。

怨みは處女の胸を千切り刻みつける。

『詩人の李さん！……』

と、あらたまつてグランケル氏は哀れに呼んで、徐かに彼に進みよつた。又彼の手をシッカと握りしめた。

『李さん！　僕はもうあなたに二度とお目にかゝれないことだとばかり思つて居ました！

……何度も！……』

と、哀訴して言ひ淀んだ。

『……』

メリーの物狂はしい泣き聲は高かつた。

『李さん！……實は僕は！……メリーを連れて……！』

と、グランケル氏は涙に咽んで聲もとぎれた。

悲痛に俯向いて、片手を彼の肩においた。

溜息を吐きだし、悲しさをこらへて

『實は……』

と、又溜息をついた。

『あのメリーを連れて、あなたを捜しに出たのです！……』

と、酷く顔を物沈ました。

メリーの泣き聲は高まつた。

我が主人公の彼は、眼をつぶつて頷垂れたまゝ、息も吐き出されない。

胸は痛く頭は苦しかつた。

闇は迫つて來る。

『僕はもうあなたには、遇へないのだと！……駄目だと思ひました！……』

と、グ氏は一層哀れに力を落とした。

『……』

『李さん！……』

と、メリーは彼の脚を抱きしめて、啜り泣く。

その哀れな泣き聲は、悲しく森の隅々までも、闇をついて響きいつた。

風も吹き止んで、草葉の動く音もしない。

『李さん、いや神の與へし尊き詩人よ！

僕に……人間としての最後の任務の一つを、神樣の御前で遂げさして下さい！……』

と、我が主人公の肩の上の手に、グ氏は自分の體の重みを任かして、咽び泣きだした。

その年老いた眼は、ぢいッと彼の重垂れた顔を覗きいつた。

人の親としての、グランケル氏の苦惱の額の皺は、白髪を帽子の下に垂れて、哀れに我が主人公に、自己の胸の痛みを訴へてゐた。

『それが！……僕が住み馴れた家も、富も、名譽も何もかもを捨てて、メリーを連れてあなたを捜しに、この長い當もない旅路に出た、最後のたゞ一つの御願ひであります！……詩人の李さん！……』

と、物沈み、默り込む。

あたりは寂寞に、闇に呑まれてゐる。

『神よ！』

と、グランケル氏は御天を仰いで祈る。

空に星は瞬いてゐる。

涙は胸で咽ぶ。

メリーはしやくる。

『わたしは神樣！　あなたを拒むことが出來ませんでした！……』

と、グ氏は神に悔い訴へる。

我が主人公は泣く、涙も冷たい。

『李さんを捜しに出ました……』

と、涙で又喉を震はす。

『神樣！……』

と、グランケル氏は又祈る。

『神樣！　あなたが、詩人の口を通して歌ひし言葉の、如何にあなたの狂はしきかを、わたしは知りました……——

「神よ
神よと
祈る言葉も
さすらひの空

神よ
神よ
神よゝ
叫ぶ言葉も
神よ
神よ
神よゝ
泣く言葉も
神よ
神よ

神よゝ
痛む言葉も
神よ」

ゝ——。

あゝ神樣！　すべてはあなたでした！　殺傷のこの世で、痛み惱むはあなたばかりでした！　斃れるのもあなたばかりでした！

わたしは今、あなたの狂ひの、その李さんに遇ひました。あなたの胸のうちの、痛ましさを察し申します！』

ゝ、グランケル氏は祈り叫ぶ。

急に喉を鳴らして泣き出し、顏を力なく垂れて、

『神樣！　御存知の通り、此の愚か者は、出來るだけ多くのあなたの人たちを笑ひました。殊に李さんの詩を呪ひました。彼を叛逆者の如く斥けました。しかしたうゝこうわたしは、

あなたの、自分のうちに宿る靈を打ち消し、曇り錆びらしてしまふことは出來ませんでした。わたしの靈は狂ひはじめました……幾萬の富、譽れの名も、山海の珍味も、地位も、わたしの靈を消え失せさすことは出來ませんでした。……良心は燃えだし、靈は輝きだしました！……わたしはたうとうこの世の殺傷の魔から眼さめました！……物質に囚はれた自分を救ひ出しました！……物質のために成りたつたこの社會が、人間のためにすべて惡なるを悟りました！……又人間は自己の肉に生きるがために、生存競爭を續けなければならぬことが、誤りなるを知りました！……人間の肉は神のあなたでした！ 靈があなたなる如く、あなたにして、靈なることを知りました！……又その肉のために生きようと行ふ生存の物質の殺奪が、肉を生かすことにならざるを悟りました！……すべての人間の靈は同じあなたなるが如く、肉も同じあなたなるを知りました！……故に肉に完全に自己が生きようとすることは、靈肉ともに完全に生きることであり、靈肉に完全に生きることは、自己も人も痛みなく、苦しみなく、完全に生きることであり、靈に完全に生きることは、肉にも完全に生きなければならぬことを悟りました！……故に人間は物質のために生きる

のではなく、靈肉の人間のあなたのために、物を使はなければならぬことを知りました！……又自己が完全に生きんとすることは、人を完全に生かさんとすることであり、完全なる利己は完全なる利他であることを悟りました！……すべては人間に二人はなく、人間の靈肉の神のあなたであることをも、始めて覺ることが出來ました！……』

と、グランケル氏は懺悔の涙に、祈りの聲も吃つて、暫くは續かなかつた。又哀れに

『神樣！ わたしはあなたに眼ざめし、人間のグランケルであります！……。

神樣！ けふわたしは、あなたの苦しき胸の藻掻きの詩人の李さんに遇ひました。あなたの御旨の、この世の人間としての、最後の任務の一つを成し就げようとして居ります！……。

神樣！ どうか尊きあなたの詩人の李さんの上にも、メリーの上にも幸いあれと壽ぎ給へ！……。

神樣どうか、この憐れなる者の上に、導きの御手を下し給へ！……』

と、彼はやうやく涙のうちで祈り終つて、涙の我が主人公の方に眼を轉じた。悲しく見入つ

た。

彼の惱ましい胸は、グランケル氏の祈りに、ます〳〵涙苦しく、痛んで來るばかりであつた。

闇風に森は戰く。

メリーの泣き悲しむ聲は、處女の胸を痛めて續く。

彼はメリーの泣き聲に、又重苦しい吐息をつく。心は狂はしい。

やつと彼は頭を擡げて、力ない眼でグランケル氏を見た。

二人は見合つた。

グランケル氏の涙ぐましい眼は、物悲しく沈んで

『李さん！　僕等の宿まで歸りませう！……』

と、願つた。

メリーを呼び起した。

我が主人公の視線は、思はず、立ち上がるメリーの方に動いた。

——花恥しい戀しいメリーは、今自分の眼の前で、涙崩れて泣き續けてゐる——。

彼女のその痛ましい姿は、彼の胸に針を突き刺すやうに痛く苦しく、彼の心は八裂に引き裂くやうに、全身がチリリッと慄き鳴つて

『あゝ神樣！……』

と、彼は御天を仰いで物狂はしく叫んだ。

兩手をブル〳〵顫ひ上げて藻掻く。

グランケル氏も彼の肩から手を放して、彼に從いて合掌して祈る。

『神樣！……』

と、彼は又兩手を物凄く顫はして、狂ひ叫んだ。

御天に星は閃いてゐる。

『神樣！　神樣！……』

と、息塞まつて又

『神樣！……』

と、彼は悶へ苦しく祈り續ける。

メリーも泣き止んで祈つた。

彼は祈りからさめると、又急に全身の力をドッと失つて、頭を垂れ落とした。

やゝ暫らくして、やつと彼は少し力を盛りかへして、メリーの方に進みよつた。

『メリーさん！』

と、呼んだ。——その聲は弱く小さくせつなく、恐ろしく顫へてゐた。

彼は頭を振つて、徐かに

『神樣！』

と、祈つて、嚴然と

『メリーさん』

と、自分以外の或る侵すべからざる力ある聲で呼んだ。

悲しい胸の塞まつたメリーは、顔も上げられないで、乙女の優しいはにかんだ聲で

『ハイ』

と、可愛いらしく泣き止んだ。

彼は又一歩メリーに進みよつて

『メリーさん、神樣にお祈りしなさいネ！……神樣は清いあなたを守ります、あなたの胸のうちを御存知でゐらつしやいます！……神樣は一人の人をも泣かすことは出來ません！……メリーさん！……』

と、呼んで、彼は又

『神樣！……』

と、御天を仰いで、靜かに祈る。

メリーが小さき女性の聲は、又優しく清く

『ハイ』

と、答へて、徐かについて祈る。

グランケル氏も祈る。

夜風は迫る。

さすらひの空

森は鬱々。あたりは暗い。

闇は募る。

三人は互に自分の胸を、一つの神に告げる。

御星もこもに祈つて瞬く。

涙は三人の合掌した兩手に落ちる。

十饅頭は白骨を埋めて、黑く横たはつてゐる。

二

夜は既に寒かつた。

風は、ヌーッと闇立つ樹々を戰かし、枯葉を鳴らして吹き過ぐ。

三人はやうやく森から出た。細い山路を、メリーが先きに立ち、グランケル氏は後に立つて、

頷垂れて歩いた。

胸が一ぱいつまつて、誰も何んこも口がきけなかつた。

しかし淡い希望は、三人の上に支配されてゐた。

路は次第に谷を下りて行く。

兩側の山は黑く嚴めしく聳え立ち、枯葉落ちた骨ばかりの樹々は、夜空に高く、あたりは、家

もなく、明りもなく、體を寒氣慄かすほど、黑い魔獸のやうな闇の沈默が、重く横たはつて

ゐる。

その上を、幽玄なる闇空は、星を瞬いてキラ〳〵と、下界を包んで、遠山はボウッと眠つて

る。

遠い空の北極星は、北斗七星に衛られて北を示して輝き、隕星は長い尾を描いて飛んで消える。

闇路を辿る重い三人の足音は、深い山奥にたつてゐる。

歩むにつれ水音が響いて來る。サアー〳〵とその音は、三人の耳に騒がしく擴まつて來る。

サラ〳〵と立つ流れの音も、ポタリ〳〵と滴落ちる谷間の音も、ともに縺れあつて、時に高く、時に低く響く。

三人の惱みの胸は、思はずこの騒がしい響きに搔き消されて、共に路を急ぐ。

進むにつれ、水音は又薄らぎ行く。

更に急ぎ、水音が遠くで微かに聞え、消え失せようとする頃、路は小高い岡の上に出た。

遠い向ふに、小さい燈がチラッと現れた。

三人はその小さい燈の尼寺に辿りついた。

部屋はかたい沈默で閉ざされてゐた。皆重苦しく頷垂れてゐた。

その悲痛な沈默は、長いこと皆の上に續いた——語るには、彼等はあまり自分等の胸が痛ましかつた——。

狹苦しく、かたく闇におし込まれた温突の隅つこには、小さい一本の蠟燭がぼうッと光つてゐる。

三人の横顔は、息苦しく微かに照らされてゐる。

風はヒューッと吹き荒んで、障子窓を酷く打つ。

俯向き惱んでゐるメリーは、我が主人公の顔を時々せつなく盗見しては、又瞼を垂れて疊を見詰める。

人知れぬ悲しみの溜息は、彼女の小さい胸を襲うて來る。

又戀しい人を恨めしさうに盗見る。

我が主人公の重苦しい胸は、新たな惱みに騒ぎだした。

こはく、ソーッと眼を廻して、メリーの顔を盗見た。

メリーの輝く瞳にキョッと衝突した。

吃驚して彼は、急いで視線を伏せた。胸は轟きだした。

「俺は清いメリーを、汚がさうとする！　汚がさうとするのぢやないか？」

と、胸のうちは全く落着きを失つた。

「そういふ筈はない、メリーは俺にはまだ若い……」

と、打消した。

「いやそれでも、メリーは俺に戀して居る！」

と、心も感情も美しいメリーに魅惑された。熱して來た。向ひのグランケル氏に氣を配つた。

「俺はごうしたのだらう？……俺のうちには一點の邪心もないが……俺はメリーをちつとも汚がさうとも、ごうせうとも穢い心を持つてないが……」

と、彼は、胸底まで熱くなつて、顏のほてつて來るのに驚いた。

「いや俺はそんなことはない、メリーと一緒に坐つて居ても、俺は彼女にちつともやましい心を持つてない。……俺は清い人だ！……」

と、強いて氣やすめの言譯をした。自分のうちの或る下劣な快感を追ひ拂つて、いらだつ感情の嵐をおし鎭めようと、手の指をぢいッと見詰めて、漠搔いた。

「若しか、グランケル氏が俺の胸のうちの騷ぎを知りはしまいか？」

と、思ふと、一時にカッと顏が眞赤に燃え上がつて、頭の奥までも血がグラ〳〵ッとのぼせた。

彼は慌てゝ、なんとかして心の平靜に歸らうと焦つた。

けれども反對に、彼の全身の脈搏は、ます〳〵ドッキ〳〵と、熱く動悸打ち轟き、全く彼を狼狽させた。

彼はごうかして、自分の轟きをおしかくさうと、口を喰ひしばつた。息づまつて、喘ぎ震へた。

さあらぬ態を裝はうと、二人に探り眼をそーッと配つた。

又ギョッと、酷くメリーの視線に衝突した。

あッ！と、全身が眞赤に燒けて、吃驚して俯向きかへつた。胸の轟きに息も塞まつた。

全くメリーの鋭い視線に翻弄された彼は、又なんこか自分の胸を壓し鎭めようこあせり苦しんだ。

けれごも、ごうしても平靜に歸るここは出來なかつた。胸の鼓動はます〳〵高く沸きかへつて轟き、頭は眞赤に燒けきつて、ほんやりこ混亂に陷つてしまつた。

「俺はごうした！　俺はごうした？」

こ、慄いた。齒を嚙んで自分の胸をおさへた。

「若しか二人が、自分の狼狽を知りやしまいか？」

こ、ます〳〵胸を轟かした。全身はます〳〵熱に燃え上がつた。

部屋はシーンこして、闇は固かつた。

「俺はごうしたのだらう！　メリーこ一緒に居つてごうして惡いんだ！……皆んなは沈みかへつてるのに、……俺ばかりはごうした！　メリーだ！　メリーだ！　メリーの異性に狼狽した！　俺には彼女が欲しい！……」

こ、悶へ苦しく、背中に冷汗が通つた。

彼はかうした混惑こ羞恥の苦悶のうちに、非常な努力で、やつこ顏をちよつこ上げて、グランケル氏を見た。

グランケル氏の視線にビッタリこ見詰められた。

彼はぞつこ狼狽し、胸底までもビリッこ驚いた。急に全身は慄き强ばつて、息塞まり、胸は雷打ち轟き、頭は熱のあまりぼうッこ、ヒーンこ耳鳴りがしてしまつた。ごうする術も知らなかつた。

急に飛び上がつて逃げだして仕舞はうこした。しかしそうするここも出來なかつた。

ます〳〵藻搔き苦しく、全身が汗まみれになつて、顏へ縮み上がつた。

體中何處もが眞赤に燒けてゐた。

外の嵐は窓を打ち鳴らす。

グ氏こメリーは默つて沈みかへつてゐる。

部屋はぼうッこ小さい蠟燭ばかりが照らしてゐる。

我が主人公の頭からは、苦悶の湯氣が立ちのぼつてゐる。

彼は眼をつぶつて、もう何も見まいと努めた。が、瞼も强ばつて閉ぢられなかつた。

たうとう轟く彼の胸のうちからは、鼓動の雷音が響き、頭には熱の爆發が散つた。息は急迫に喘ぎだされた。全身はおさへることも出來なく、膝の上の手までが、波立ち顫へてゐた。

それでも彼は、轟き鳴つてゐる自分の胸をおさへつけようと、藻掻き苦しんだ。けれども、たうとう彼は

『アッ！　苦しい！』

と、突然叫んで飛び上がつた。

ドッと力を失つて後の壁によりかゝつた。

皆は吃驚した。

『李さん？』

と、グランケル氏は驚き立ち上りながら聞いた。

彼はやつと喘ぎ出る息の音で、

『いゝえ、なんにも……』

と、頭を振つた。又苦しく息塞まつた。

『お坐りなさい、話しませう』

と、グランケル氏は言つて、坐りなほつた。

彼はやつと助けられたやうな思ひがした。ふとメリーの方へ視線が飛んだ。

メリーはぢいッと瞳も動かさずに彼を見守つてゐた。

又ぞつと視線をそらしながら、彼は坐つた。

溜息をついて俯向いた。

グランケル氏は今まで、話の筋を考へてゐたらしく、惱ましい皺だらけの顏を上げて、力なく歎息つく語調で、

『僕は、あなたと最後に遇つてから、間もなく新聞を讀んで驚きました……』

と、ちよつと聲を跡切らした。考へ沈んで

『それから、何時だつたですか……あなたが支那へ逃げたとか、米國へ渡つたとか、噂が立ちました……そう……僕等が、この旅路に出る一月ばかりの前の新聞には、あなたが平

壊へおいでになるこいふので……』

こ、年寄の常にするやうに、自分の記憶を助けて貰はうこ、メリーを見やつて、又話し續けた。

我が主人公の彼は、やつこ生きかへつたやうな思ひがした。

グランケル氏の話に、出來るだけ自分の注意力のすべてを傾けようこした。そうして、何んこか體の熱をさまさうこ、熱心に耳を欹てた。

『それで僕は、平壊まで行きました……』

こ、微かに吐息つく、

『……勿論メリーも一緒でした……』

こ、グ氏は意味ありげに、メリーのメの字に、獨逸語獨特の強いアクセントを響かして、萎けた。

自分の話のきりだしが、確にグ氏自身を非常に失望せしめたらしく、

『……身を持ち崩した永子さんに遇ひました……』

こ、力なく言つて、蠟燭の影をぢいッこ見詰めて、口を噤めた。話頭を轉じようこ

『……ごうも過ぎ去つたここは、お互に話すのも面白くありませんから止しませう……』

こ、言つた。

彼も、そんな話は嫌であつた。

——つまり巨萬の富の持主であつたグランケル氏が、その富も名譽も棄てて、メリーを連れて、着のみ着のまゝの旅はてた形で、この山奥で遇はうこは、思ひがけないここではあつたが、我が主人公の彼には、驚くべきここでもなければ、又謎でもなかつた。それは有り得べきここであつた。

又昔覇氣滿々たる福々しいグ氏の紅顔が、非常に陰欝に窶れて、惱ましく物沈みがちに、皺だらけになつて居るここも、別段不思議なここではなかつた。それに、今更昔の記憶を喚び起して、自分等の胸を殊更に痛めさせたくもなかつたから——。

『……たゞあなたにお目にかゝりたいばかりにでした……』

こ、グ氏は又力なく言つて、年寄らしい細眼使ひで薄暗い明を通して、メリーの方を見た。

壁にもたれて坐つてゐるメリーは、闇に包まれて、二人の方を等分に見てゐたが、又顔を伏せた。

グ氏は自分の娘が可哀いさうに、

『こちらへおいで……』

と、聲を曇らして呼んだ。

メリーは遽かに兩手に顔を埋めて、シク〳〵啜り泣きだした。

我が主人公は頷垂れて眼をつぶつた。息も微かであつた。

夜は、吹き荒む嵐に包まれて更けいつた。

部屋の空氣はシーンとして動かない。

グランケル氏はやつと顔を擡げて、

『メリー、もうお前は泣かないでくれ、儂はお前のために、お前と共に一年近くも、雨の日も吹雪の夜も、霜も踏み風にもさらされて、山中を歩き廻つた。お前のためには富も名譽も、皆棄てた?……お前の遇ひたい李さんに、今は遇つたのぢやないか……』

と、宥めて、眼を霑はした。

メリーは、しやくり上がる涙をこらへて

『はい』

と、温なしく答へた。

グ氏は隅つこの蠟燭を、ぢいッと見詰めてゐる。

向ひの部屋でも何んの音もたゝない。

メリーの鼻を泣き啜らす音ばかりが、哀れに立つ。

暫くしてグランケル氏は、我が主人公の彼の方を見向いた。

彼は顔を深く頷垂れて、胸が一ぱい塞がつてゐた。

『李さんそれは……』

と、呼んだ。

彼は顔を上げて、グ氏の顔を見た。

二人の眼には涙が霑ばんでゐた。

『……それは、お目にかゝつて、色々なことを話したいからでした……』

と、言つて、又年老いた親心の鈍い眼の視線をメリーに投げて

『メリー、お前もこちらへ來たがいゝぢやないか、其處は寒いから……』

と、彼女を促して見守つた。

『……』

メリーは默つて、ハンケチを取り出して涙を拭いてゐた。

『たゞそれは、あなたがこの世においでになるうちに、遇ひたい願望ばかりにでした……』

と、グ氏は彼の方に向きなほつたが、又溜息をついて、俯向いた。

彼も頷垂れた。

やうやくにして、グ氏は又顏を上げて

『しかし、そんなことを言うてなんになりませう……實際なんになりますか……今晩あなたとお話したいのは……』

と、少しく力づいて、後の話を考へるために、蠟燭の火を見詰めた。

我が主人公の彼も、その小さい明に視線を注いだ。

蠟燭の焰はほうッと、音もなく燃え上がつてゐる。

部屋は深い沈默の闇に呑み込まれてゐる。

夜はシーンと更け行く。

二人の思ひは、ともに重苦しく續く。

我が主人公の眼は、そーッとグ氏の顏をかすめ見た。彼の心はまだすつかり落ちついてはゐなかつた。メリーの鼻息の一つ一つにまで鋭い耳を欹てゝ、胸を苦しく轟かしてゐた。

グランケル氏の視線は、彼の方に向いた。

彼は自分の顏が、又ほてつて來やしまいかと驚いた。

出來るだけ、メリーのことは自分はちつとも構つて居ない、非常に冷淡だといふ風に、グ氏に見せようと骨折つた。

しかし彼は、グ氏が、自分の心のうちを見破りやしまいかと、グ氏の顏を見探つた。

グ氏は又彼の顏から、視線を忘るく明に移しながら

『人間は、自己の心のうちを、隱さずに言ひ得る自由を持たないでせうか？』

と、言つて、返辭を待つて、彼の方に又視線を戻した。

彼は痛いところをビッタリと突かれたやうに、胸がドキッと落こされた。グ氏の顏をチラッと見た。

グ氏の視線は、ぢいッと彼を射つめてゐた。

彼は又胸の鼓動が騷がしく浮き沈んで、顏が熱くほてつて來た。

ぎまぎして、「持つてます〳〵、誰にもに、現にこの部屋の三人が皆……」と、言ひ放したかつたけれども、轟く胸の息を殺して、ぢいッと俯向いた。足を見詰めて、騷がしい感情の嵐をこらへた。

『……若しさうであつたら、この世の人間は、どんなに自分の胸を痛めないで、すむことが出來ませうか！』

と、グ氏は又言つて、溜息をついて頷垂れた。

彼の胸は、ます〳〵動悸打ち顫へた。

「勿論そうですグランケルさん、わたしはあのメリーを愛してます、メリーが欲しいのです、人間の生え上がらうとする心を、おさへるのは皆惡いことなのです」と、その時、彼はどんなに大きい聲で叫びたかつたことだらう！

メリーの泣き聲は、又彼の鼓膜を鋭くつき破つて高まつた。

彼の痛む胸はビリ〳〵裂かれるやうであつた。

又苦しく喉が息塞まつた。額にも背中にも汗が滲み出て、體は慄きだした。

彼は又自分の熱苦しい胸を、おし鎭めようと努めた。

しかしどうしても、自分の胸の奥を長くおさへつけて、居こたへることは出來なかつた。

『メリーさん！　寒いから此方へおいでなさい』

と、彼は自分でも吃驚したほど——その聲が自分の何處から出るのか——頭のうちがクワッと燃え上がり、胸が動悸つぶされて固くなり、戰き震へながら、息苦しくヤッと言ひ終つて、又彼は自分の聲に吃驚した。

後頭が熱くなつて何か重いもので、酷く自分の全身を押しつけるやうであつた。

メリーは泣き止んだ。

暗い部屋はシーンと沈みかへつて、一層暗かつた。

嵐の音ばかりが、外で高い。

メリーはシクッとしやくつた。

グ氏は、頷垂れた顔をメリーの方へ向けた。

『メリー、お前はもう泣かないでもい、だらう……この部屋には、誰もお前の本心をおさへ隠さして、お前の胸を痛めさせようとする人は居ない。お前を生え上がらせようとする、お前はそれを知つて居る筈だ……』

『ハイ……』

と、メリーはやさしく、ハンケチで涙の顔をおさへたま、答へた——その聲は非常にせつなく顫へてゐた。

我が主人公は、蠟燭の火を、ぢいッと見詰める。

又胸は惱み悶へだした。

「俺は今自分を欺いてゐる……自己を欺いて人を泣かしてゐる……。俺はメリーに戀してゐる、又生理的の滿足に慄いてゐる……人間は皆この二ッの慾念に滿足しなければならない、そうしなければ完全には生きられない……なぜ俺は自分を欺いてまで、彼女を泣かさうとするのだ、それがどうしたことだ?……」

と、苦しんだ。

「しかしそれは出來ない。……どうして?……出來ない……なぜ?……あー俺はどうせうといふのだ?……なぜ俺は、生きのびなければならない人間に、同じ人間の心の上に、なぜ俺は!……隔てと隙間と假裝の黑幕をはりつめようとするのだ!……淸い人間の心を曇らし、人間と人間との共通な心を、隔て引き裂き、自分も痛み、人をも痛めさせようとするのだ! 俺はこうからメリーを愛して居る、メリーも俺に戀してゐる、彼女も一人の異性を求めてゐる!……俺はどうして、二人は互に自分の心を打ち明けて話合はんのだ? 熱烈にどちらも燃え焦がれて居ながら、それがどうしてだ、どうして俺は! 俺はどうして自己の本心の通りやらないのだ?……」

と、藻掻き苦しき眼を瞬いた。

「いや、いけない……」

と、頭を振つた。

「俺はこの世での人生のあらゆる望みを抛擲した。メリーはまだ若い、この世を知らない。俺は又現世での、自己の生を頑ばることは出來ない。それはなんの意味をもなさない、却つて心を痛めるばかりだ。物質の社會で、人間は生え上がることは出來ない……メリーの胸にます〳〵痛みをまさせることだ！……この罪惡の世界では、人間は――一人の男は、一人の女に手を出さないことだ！……女は、自己の性慾を殺して狂ふことだ！……」

と、悶へた。

彼は重苦しく視線を明からうつしながら

「いや」と、頭を振つた。

「それは出來ない」

と、又振つた。

ところが、急に

『メリーさん、こちらへおいでなさい……そこは寒いですから……』

と、彼のうちの或ものは、突發的に彼の口を通して言つた。

彼は自分でも吃驚して瞼を落とした。

『ハイ』

と、メリーの細い天使のやうな聲は、又彼の胸を轟かして聞えた。

その聲は哀れであつた。

「一體俺はどうしたのだ？……」

と、彼は又顫へた。

「いや俺はメリーを遠ざけよう！……」

と、ます〳〵頭を憂氣垂れた。

『お前は、それでも來ないか？』

と、グランケル氏は言葉を繼いで

『儂はお前の幸福のために、この世で、親としての務めを果たすがためには、お前を連れて、今迄歩き廻つたのだ！

お前の心のまゝに、お前の生を傷つけないがためには、自分としては最善の努力を盡した考へだ！……それで儂の親心も、せめて幾分かの滿足を得たと思つて居る……それにお前の求め捜したその方は、今お前の前で二人同じ部屋に坐つて居る。お前を阻むものは何んにもない。儂はお前が喜べば喜ぶ、滿足すれば、する……お前の心も儂が心も人の心も心は一つだ！……この部屋だけには、人間をおさへ縛り使ふ物質もなければ、誰もその物質に賣られても居ない、又その物質のための社會の支配を受けようともしない。……今までの、阻み縮ます醜惡の物質に囚はれた、人性を傷つける殘忍性から遁れなければならない！……それに、お前にはまだ分らないが、親心は、子を生え上がらすがために、生え上がるものだ。枯葉は落ちれば、腐つて新芽の營養になるのを喜ぶ。咲いた花は散れば實を結び、實は新芽を生やすがために有つて、滿足する……』

と、メリーを懇々と諭し宥める。

部屋の空氣は更に動かない。

『……』

メリーは聲も出されないで泣く。

『……お前はどうして泣き苦しまうとするのだ……』

と、グ氏は又、親心の痛む胸に千切れて

『メリーお前は泣かないでくれ、ここに來てくれ……』

ちよつとの間をおいて

『少くとも儂が、世間並みの親でないことを知つてくれ！……この世の親たちは子のためと思つて、生え上がらうとする子の芽を阻むのだ！　しかし儂は、お前が芽を生かすがために生きる。子を產んだ以上は、親はその子の生長のために生きなければならんのだ、……少くとも、親が窶れて朽ちれ行くのは、子が生え上がるためだ……儂はお前の生長のためには、儂のすべてがお前のためにある。時にはお前の生長を防げるものを取除く、又曲がる時には正す、鈍る時には促がす。そうして親は子に換へられるべくあり、子は親に代